

楽浪土城址出土の土器(中)

—楽浪土城研究 その3—

谷 豊 信

2. 軟質灰色系土器(承前¹⁾)

(4) 小型鉢(図6)

口径7~10cm, 高さ3~4cmの小型の器である。

図6-1(図版7-1)²⁾の表面はやや黄色がかった灰色, 断面は灰色である。底面以外は回転を利用したナデ調整(回転ナデ調整)を受けているが歪みが目立つ。口縁部の厚さは一定ではなく, なめらかに変化するものの, 6~9mmと場所によってかなり差がある。また底部と口縁の位置もずれている。底面には静止糸切り痕が残っている。2(図版7-2)の表面は焼成時の煤の付着で黒灰色となり, 断面は表層が灰褐色, 中心部が灰色を呈している。回転ナデ調整が施されているが, 内壁に粘土紐の継目が消されずに残っている部分があり, 口縁の上端も波をうっている。底面には静止糸切り痕が残る。3の表面は灰色から灰褐色, 断面は濃灰色である。内面には粘土の継目や指押さえ痕が残っており, 側面も軽く横ナデされただけである。静止糸切りの後, 側面下端を荒く篋削りしている。

4は表面が淡褐色, 断面は灰色である。内外面は強く回転ナデ調整され, 器壁の厚さは一定で全体の形にも歪みがない。静止糸切りのあと, 底面に沈線が何本も引かれ, その後底面と側面の境が,

5は表面が淡褐色, 断面は灰色である。内外面は強く回転ナデ調整され, 器壁の厚さは一定で全体の形にも歪みがない。静止糸切りのあと, 底面に沈線が何本も引かれ, その後底面と側面の境が,

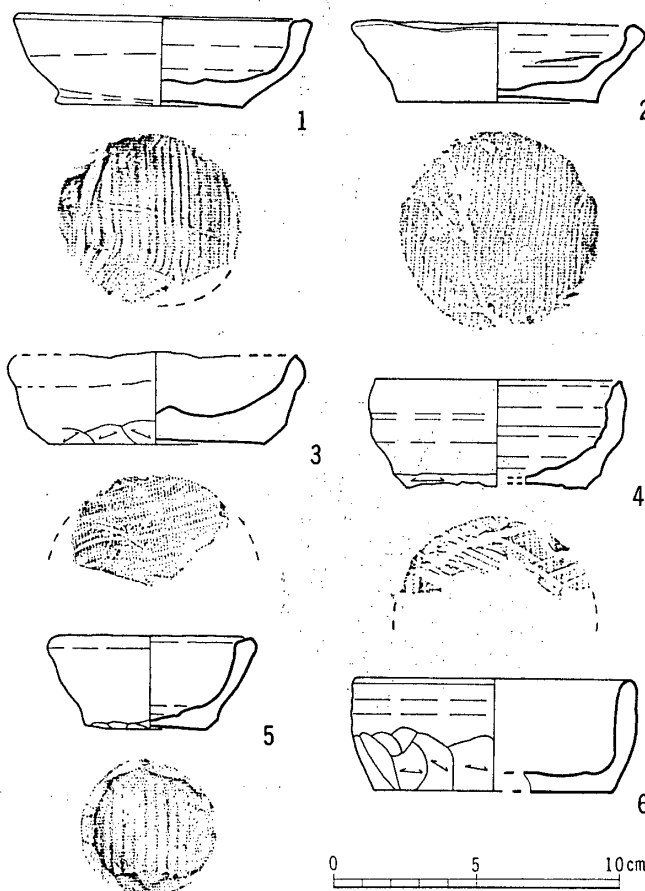


図6 楽浪土城址出土の小型鉢(1/3)

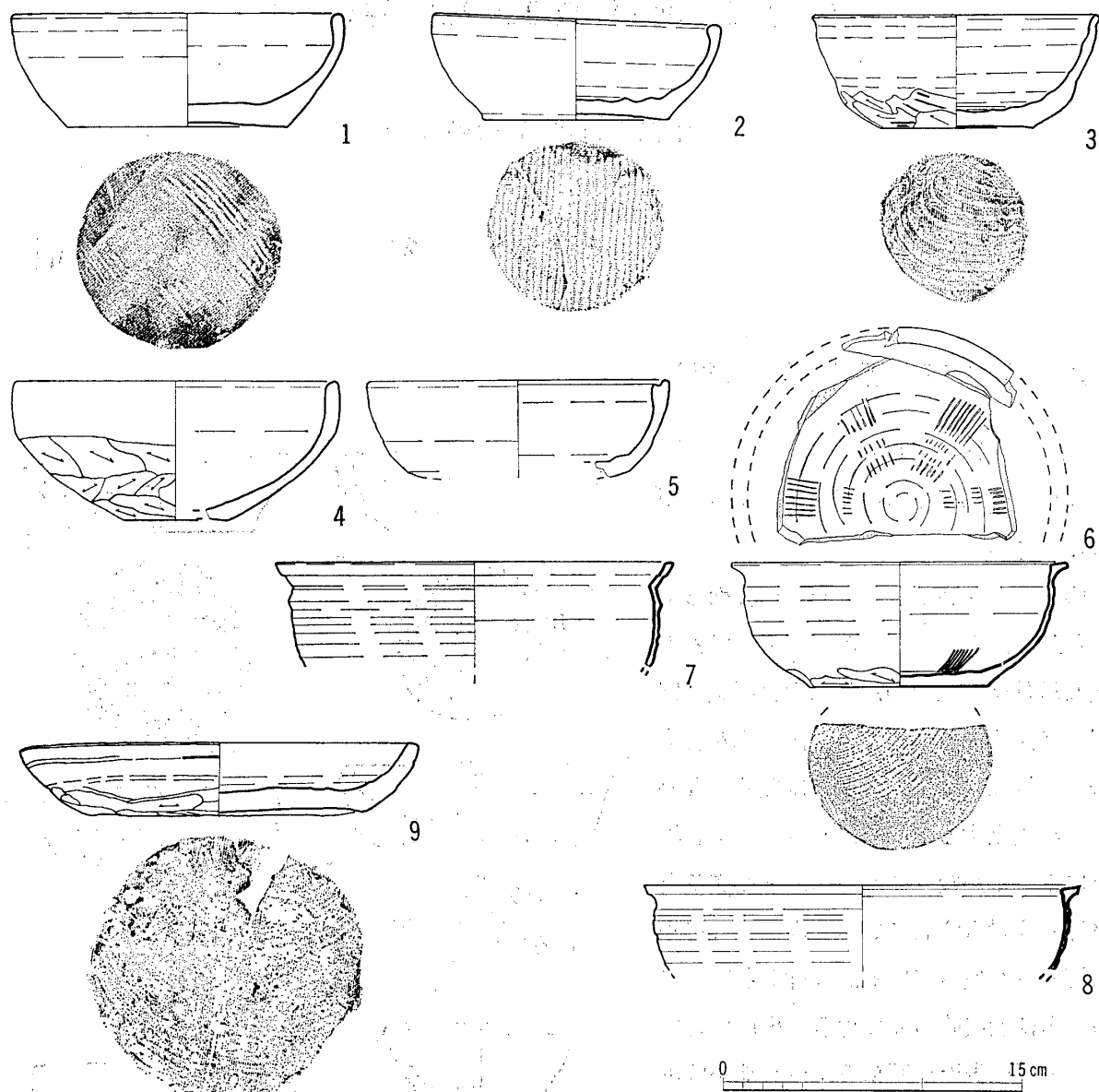


図7 楽浪土城址出土の鉢・盤 (1/4)

篋削りされている。5 (図版7-3) の表面は黒灰色，断面は中心部が濃灰色，周辺部が灰褐色を呈す。内外面は回転ナデ調整されている。底部には静止糸切り痕が，底部と側面との境には篋削り痕が見られる。同形の破片がD区域からも1片出ている。6は表面が内外面ともやや暗い灰色，断面が明るい灰色である。側面下半は篋削りされている。底部はナデられて平滑である。

(5) 鉢 (図7)

楽浪土城址出土の土器（中）

直径十数 cm～20cm，高さ 6 cm 内外の器である。

図 7—1（図版 7—4）は表面・断面とも灰褐色である。底部には静止糸切り痕が残る。2（図版 7—5）は明るい灰色を呈し，底部に静止糸切り痕が残る。3（図版 7—6）は表面が灰黒色，断面が灰色であり，比較的焼成が良い。側面下半が横方向に粗く篋削りされる。底部の糸切り痕は曲線になっているが，痕跡の間隔がほぼ一定であることから静止糸切りによるものと判断される。4 は表面が灰色，断面が褐色である。底部はやや小さい。側面の下半分が篋削りされ，僅かに残る底部にも篋削り痕が見られる。5 は底部を欠くが，1～3 とほぼ同様の器形と思われる。表面は灰褐色，断面は表層が灰褐色，中心部が灰色である。口縁部に段がつく。これらに類する口縁部破片はほかにも 10 片ほどある。

6（図版 8—1）の表面は灰色，断面は表層が明るい灰褐色，中心部が明るい灰色を呈する。内外面に回転ナデ調整が施され，側面下部は横方向に篋削りされる。底部の外周部は調整されて平滑になっているが，底部の中央には静止糸切り痕が残る。内面にはナデ調整以前に引いた沈線がかすかに残っており，各 7，8 本の沈線からなる帯が中心から 6 方向に放射状にのびている。一見楯目に見えるが，沈線同士は平行でなく，線と線との間隔は中心を離れるほど広がっている。

7（図版 7—10）は表面が灰褐色，断面が濃灰色，8（図版 7—11）は表面が灰黒色，断面は表層が灰褐色，中心部が灰色である。7，8 は口縁の形態には違いがあるが，胴部の形態からみて 6 とほぼ同じ器形になると思われる。

小 括

以上の鉢類は日用の食器であろう。

図 7—6～8 によく似た土器が，対馬と北部九州の弥生時代遺跡から発見されている。対馬の美津島町小式崎遺跡第 1 号箱式石棺で弥生期の土器，鉄鉢とともに発見された土器（図 8—1）は，図 7—6 の土器に酷似する。この土器は報告によれば

復原高 7.2cm，口縁径 18cm，底部径 8.3cm を測る。ろくろを使用して製作され全体として非常に整っている。内面底部には図示するような 7～9 条の沈線を 4 ケ所に放射状に配置する。この条痕が胴部にいくとロクロ痕のために破線を呈する。胎土は精選された粘土を用いているが焼成は軟質である。色は灰褐色をしている。底部には板目痕が認められる。（文献 3，33 頁）

という。条線の数こそ異なるものの，他の点では両者はよく似ており，小式崎第 1 号箱式石棺出土の土器は楽浪郡地域からの搬入品である可能性が高い。小式崎第 1 号箱式石棺の年代は，共伴の土器と鉄器から弥生後期～終末とされている。これは楽浪土城出土の同形の鉢の年代の手掛りになる。

このほかに同じ美津島町白蓮江浦第 2 遺跡第 2 号石棺から弥生後期終末の土器，弥生後期～古墳前期に類例のある鉄釧，ガラス小玉とともに，小式崎の土器とよく似た土器が発見されている。また美津島町の隣の豊玉村観音鼻遺跡出土とされる土器のなかにも，これらと類似した口縁部の破片がある（文献 3）。

福岡県糸島郡前原町三雲遺跡番上Ⅱ—5 地区の土器溜状遺構出土の「漢式土器」のなかにも図 7

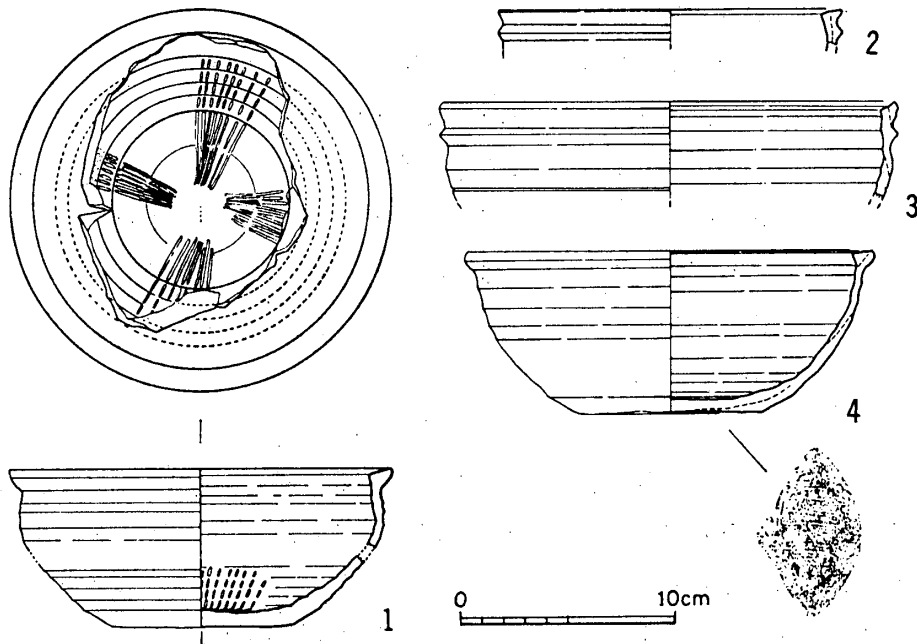


図8 対馬・北部九州出土の楽浪系鉢 (1/4)

—6～8に近い土器がある。図8—2, 3は3層, 4は3層下部の出土で, 共伴の土器は第3層が「最上層に若干量の土師器を含むが, 後期後半～終末期頃の土器が量的に多」く, 第3層下部は中期の土器を主体とする第4層に「帰属するとみてさしつかえな」く, その時期は中期

末から後期初頭頃になると思われるという⁹⁾。

このように図7—6～8のような鉢は, 対馬と北部九州では弥生後期～終末の土器と共伴する例があり, 中期末に遡る可能性のあるものもある。

(6) 盤 (図7—9, 図版7—7)

表面は灰褐色, 断面は表層が灰褐色, 中心部が灰色である。側面下半は横方向に篋削りされる。底部の糸切り痕は弧を描いているが, 痕跡の幅がほぼ一定であることから, 静止した台の上で, 左手は固定し, 右手だけを回して底部を糸切りしたものと考えられる。

(7) 盆 (図9)

やや深い鉢の類である。破片は多いが完形がわかるのは3点のみである。

図9—1 (図版7—9) は表面と断面表層が明るい灰色, 断面中心部が濃灰色である。側面には回転ナデ調整痕の下に縄目の叩き目がかすかに残っているので, 叩きによって成形されたことがわかる。側面下端と底面は篋削りされている。

2 (図版7—8) は表面が灰色, 断面が灰白色である。器の内外面は回転ナデ調整されているが, 縄目の叩き目や粘土の継目がかすかに残っている。また側面下端に篋削りが見られる。底面はほぼ平滑で調整痕は明瞭でないが, 幅広い篋による擦痕のようなものが認められる。

3 (図版10—1) は表面がやや黄色味がかかった灰色, 断面が青みがかかった灰白色である。底部は失われているが, 図24—4, 7, 8のような平たい丸底であったと思われる。器の上半部は内外面とも回転ナデ調整されるが, 外面には調整痕の下に縄目の叩き目の痕跡がある。この叩きの痕跡は

楽浪土城址出土の土器（中）

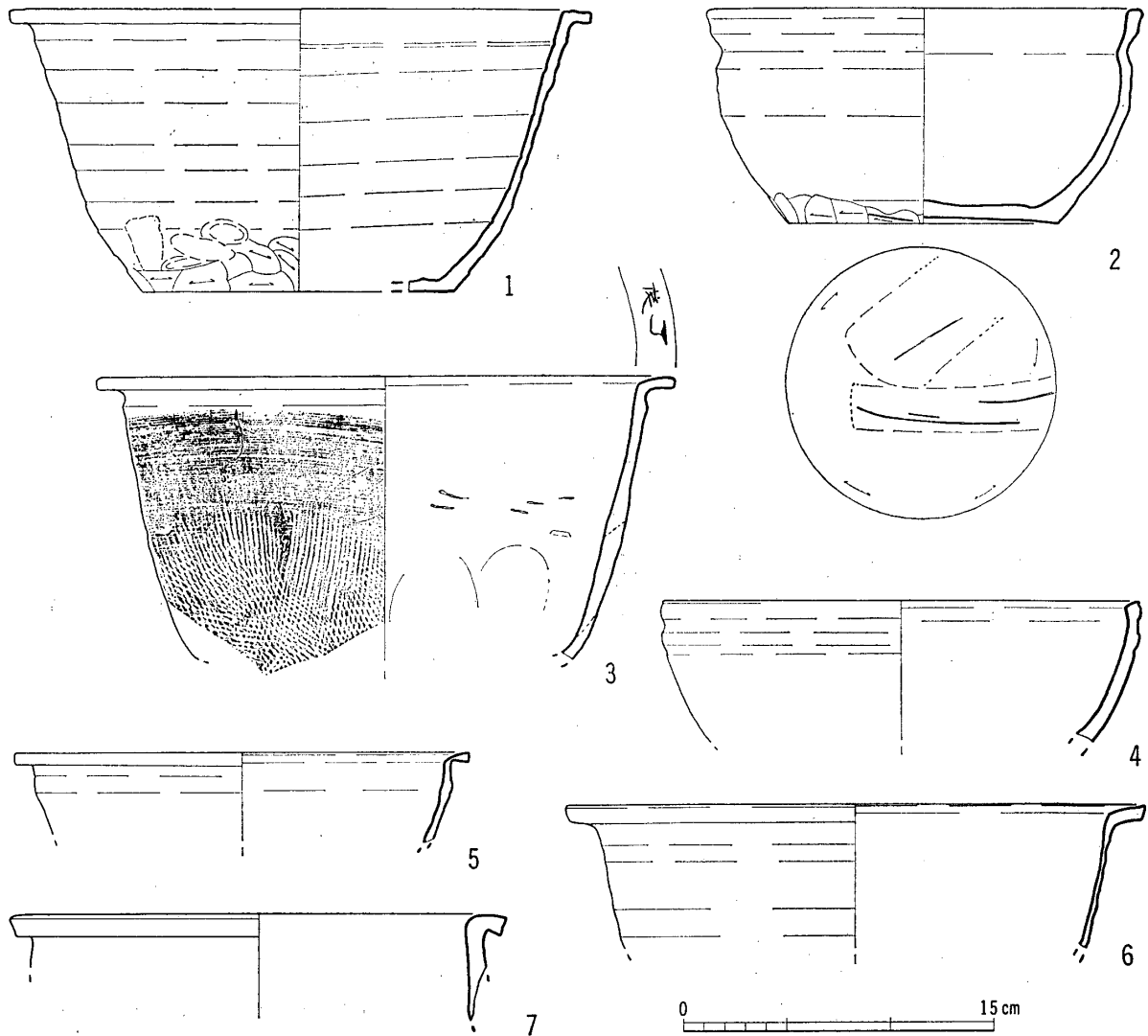


図9 楽浪土城址出土の盆（1/4）

水平に外反する口縁の下面にもある。器の下半部には外面に縄目の交錯する叩き目が、内面には直径3 cm 程の浅い当板圧痕が並んでいる。器の上半と下半の間には粘土の継目が認められる。別々に成形した上半部と下半部を接合したのかもしれない。口縁部に焼成後、または焼成前のかかなり乾燥した段階に、釘のようなもので隷書体の文字を刻んでいる。左は「茂」、右は「丁」と思われる（図10、図版10—1 a）。

4～7は口径30cm未満の盆の類の口縁部と思われる。

4（図版9—6左下）の表面は焼成時に煤が付着して黒灰色となっているが、断面表層は灰褐色、断面中心部は灰色を呈する。5は表面が薄い灰褐色、断面が灰色である。6の表面は煤の付着で黒灰色となり、断面は表層が灰褐色、中心部が灰色を呈する。7（図版9—6右下）は火を受けたのかくすんだ赤褐色を呈している。胎土は他と同様精良である。小片しか残っておらず図に示した器

壁の傾きは確かではない。

小 括

図9—1, 2のような盆は各地の漢代遺跡から普遍的に出土する。1に似た盆と甗は平壤の石巖洞古墳(塼室墓)からも出土している(文献9)。1は底部がわずかしか残っておらず、甗であった可能性もある。

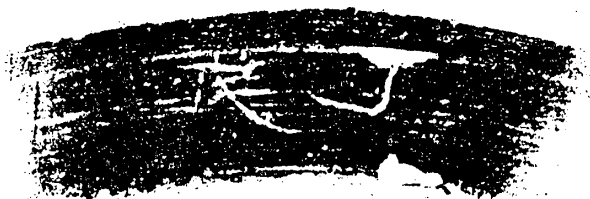


図10 楽浪土城址出土の盆口縁の陶文(拓本・実大)

3は楽浪郡地域では一般的な土器であったようである。同様の盆は、帯方郡治とする説もある黄海北道鳳山郡の智塔里土城(唐土城)からも出土し(文献15)、南浦市大安市(旧平安南道江西郡)台城里の古墳群では甗棺に用いられていた(文献14)。口縁上面の刻字の書体は楽浪郡時代のものとみて問題はないであろう。左右どちらから読むべきか確証はないが、右から読めば「丁茂」となり、漢代の人名としておかしくはない。漢代には土器に人名を刻むことがあり(文献13)、これもその一例と考えられる。

(8) 甗(図11, 12)

甗は底部に穿たれた穴の形状により二つに分けられる。やや大きな円孔を数箇所穿ったものを甗A、細長い小孔を多数穿ったものを甗Bとする。

甗A

甗Aは焼成前に篋先で円を描くようにして底部に丸い孔をくりぬいたものである。

図11—1(図版8—2)は完形を知りうる唯一の個体である。灰褐色軟質で、口縁径は42cmあるが壁の厚さは1cm未満と薄い。粘土紐積み上げ・叩き技法によって成形され、回転ナデ調整によって仕上げられている。器表面や口縁部の下面に叩き痕が残っている部分がある。器内面下半には当板の痕跡である円形のくぼみが見られる。底部には径4cmほどの丸い穴が7個穿たれていたものと推定される。

図11—2は明るい灰褐色で軟質である。本来は胴径50cm程の大型の甗であったと思われる。器壁も1.5cmと土城出土の土器のなかではかなり厚い部類に属する。底部に径6~10cmの穴が7, 8箇所穿たれていたものと見られる。外面には横方向の幅3~4cmの長い削り痕がある。

図12—1(図版8—3左上)は表面・断面とも淡い灰褐色。外面は平滑に仕上げられているが、内面には当板痕が残る。4(同図版左下)は灰色、外面は肌が荒れて調整は不明、内面はナデ仕上げである。5(同図版左中)は灰色でやや硬質である。外面には縄目の叩き目があり、内面は平滑である。

甗B

焼成前に幅2cmほどの篋を底部外面から斜めに突き刺して細長い孔を穿ったものである。

楽浪土城址出土の土器（中）

完形品はない。6点の破片すべて外面には縄の叩き目が、内面には当板痕がある。図12—2（図版8—3右中）の表面外面は灰白色、内面は灰色で、断面は灰褐色である。3（図版8—3右下）の表面外面は煤が付着して暗い灰色となり、内面と断面は灰色である。径20cm弱の底部に30個ほどの孔が穿たれていたものとみられる。底部から立ち上がるところに径4mmの孔があるが、これは補修孔であろう。6（図版8—3右上）は表面・断面とも灰褐色、薄手で小型のものであったらしい。

小 括

図に示さなかったものも含めると、甌AはB''トレンチで3点、D区域で3点、Eトレンチで1点出土し、甌BはCトレンチで1点、D区域で2点、E'トレンチで4点出土した。少数なので確かなことは言えないが、分布に違いが見られる。

甌Aのような円孔を持つ甌は東アジアで長期間用いられたものであり、年代は特定しがたい。漢代遺跡からは普遍的に出土する。また高句麗でも同様の甌を用いたようである（文献16）。甌の孔は直径1cm程度が普通であるが、土城出土の甌の孔は他の例よりかなり大きいといえる。

甌Aに比べ甌Bの類例は少ない。楽浪郡地域では石巖洞古墳（埴室墓）の副葬品に見られる（文献9）。他の地域では、遼東半島の営城子第一号墓（埴室墓）出土の甌の明器が挙げられる程度である（文献11）。甌Bに見られる穿孔法は流行した年代と地域が限られていたとも考えられる。

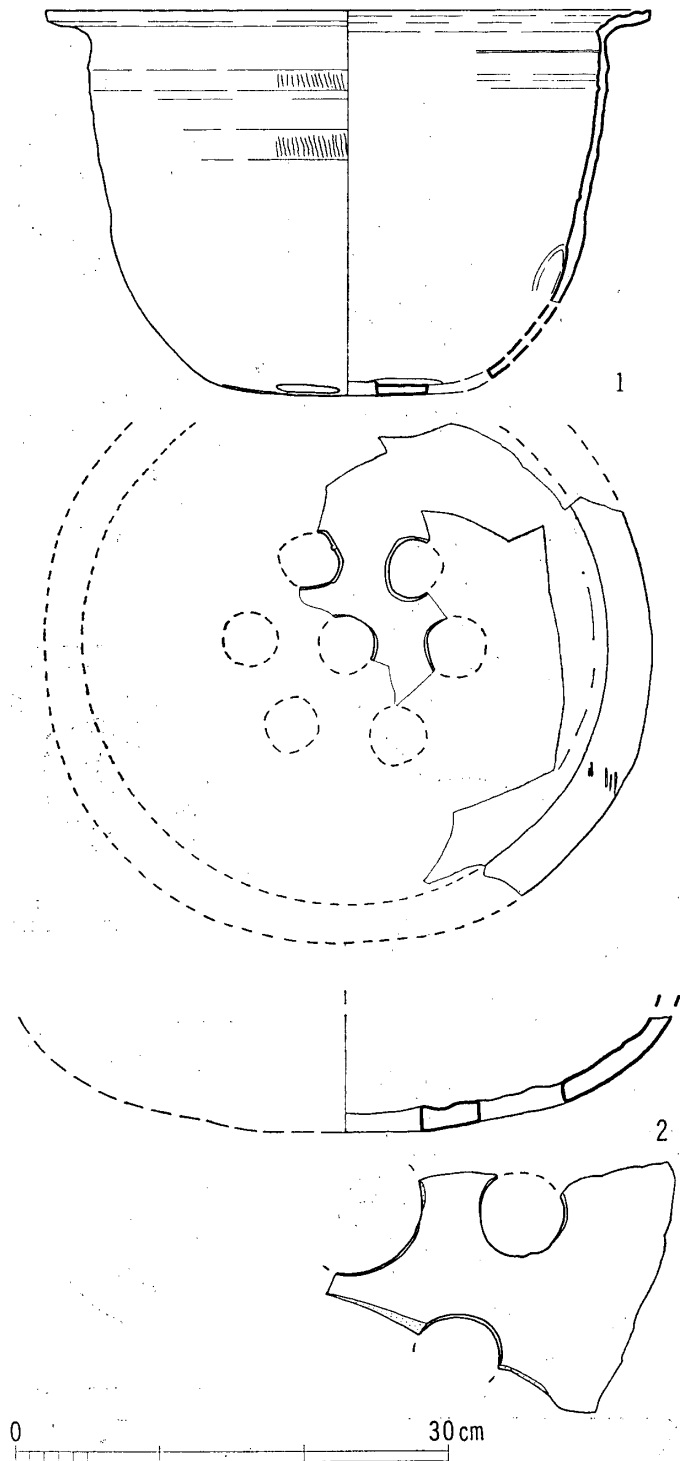


図11 楽浪土城址出土の甌（1/6）

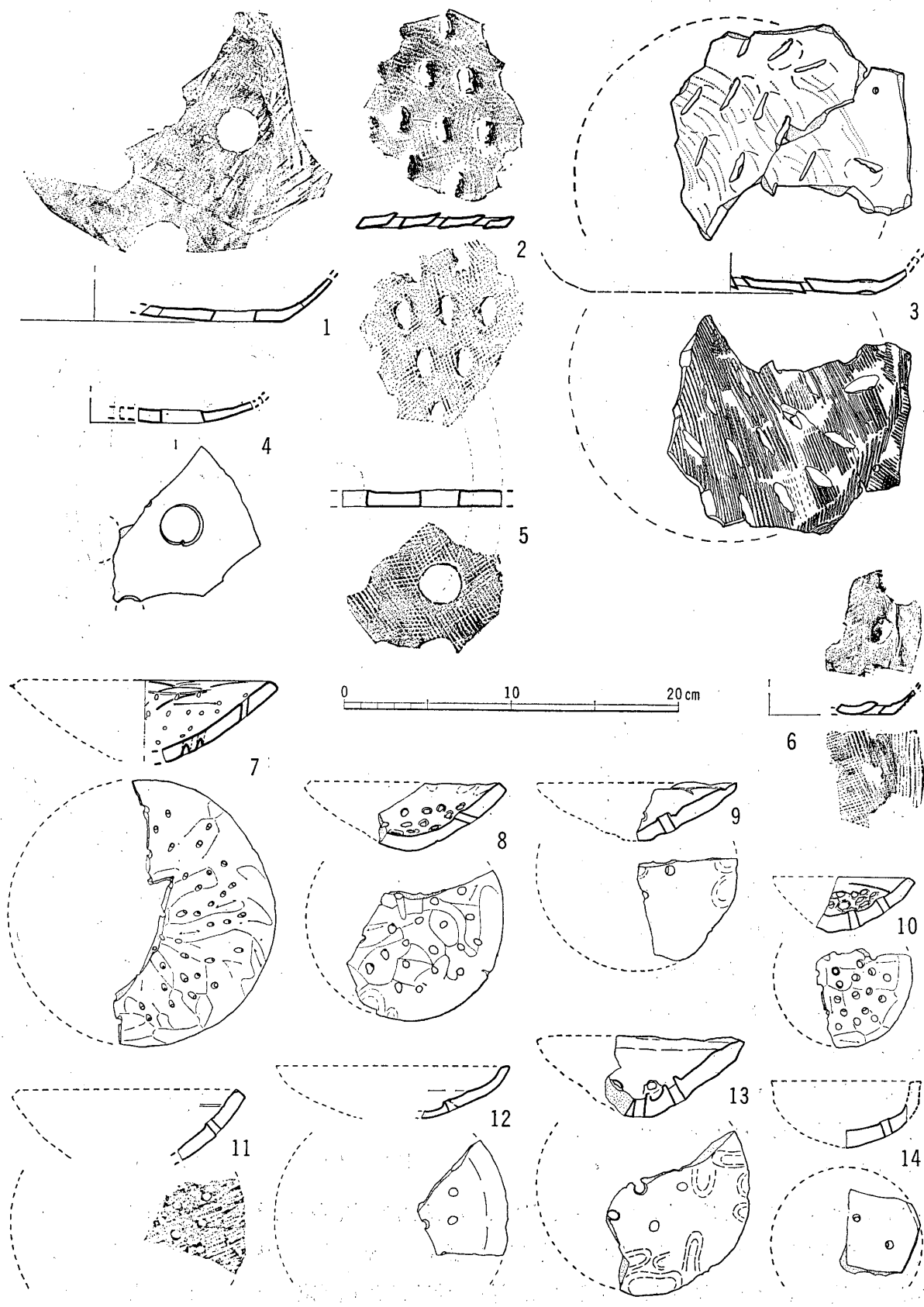


図12 楽浪土城址出土の甕底部破片・有孔土器 (1/4)

(11) 有孔土器（図12）

直径8 cm から16 cm、高さ3～5 cm の丸底の器に径3～6 mmの小孔を数個ないし数十個穿ったもので、全部で8点ある。孔は、1点を除きすべて、細い棒を凸面側から凹面側に突き刺してあけている。用途は不明で図の上下も確かではない。これらは一般に焼成が良く、比較的硬質である。孔の数と表面の調整技法から4種に分類できる。

有孔土器A

孔の数が数十箇所、凸面と周縁を篋削りするものである。

図12—7（図版9—1右上）はこの種の土器で最大の径を持つ。表面は灰色、断面は灰白色である。凸面側は放射状に篋削りされ、凹面には篋先で乱雑につけられた擦痕が見られる。孔は直径3 mm程の棒を突き刺したものと見られ、その数は全体で60個程と推定される。穿孔は凸面の篋削りの後と思われるが、穿孔の方向は判然としない。

8（図版9—1左上）は表面が灰色ないし灰褐色、断面が濃灰色でやや硬質である。凸面には不規則な篋削り痕があり、凹面の縁には指押さえ痕がある。孔は凸面側から凹面側に穿たれており、凹面側には穿孔時のめくれがそのまま残っている。孔の総数は40個程であろう。

10（図版9—1右中）は表面凸面側が灰色、凹面側が灰黒色、断面が青みがかった明るい灰色である。凸面は放射状に篋削りされ、凹面はナデ調整され、その後穿孔されている。

有孔土器A'

図12—11（図版9—1中央）は表面が暗灰色、断面が灰色である。凸面が篋削りされず叩き目のような痕跡が残っているほかはAと同じである。

有孔土器B

孔は数箇所、周縁附近に回転を利用したかと思われるナデ痕が見られるものである。孔はやはり凸面側から凹面側に穿たれている。

図12—12（図版9—1左中）は表面が灰褐色、断面は灰色である。図12—14（図版9—1右下）は表面・断面とも灰褐色。

有孔土器C

凸面・周縁は特に整えられず、凸面には指押さえ痕が明瞭である。凹面の周縁沿いにやや強い円周方向の調整痕がつけられている。孔は数箇所である。図12—9（図版9—1下中）は焼成が良く、表面・断面とも灰色。図12—13（図版9—1左下）は表面・断面とも暗灰色である。

小 括

これらの土器の性格は不明である。可能性としては甑や漉過器、もしくはその一部、あるいは通気性のある蓋などが考えられる。出土地点がわかる6点のうち5点がD区域から出土している。出土地点がD区域に集中していることは、筒杯（文献8）と共通するが、筒杯は大きさがほぼ同じであるのに対し、この有孔土器は大きさがまちまちであって、この二種の土器が直接組み合わさったものとは考え難い。

この種の土器は楽浪郡地域の墳墓からは出土しない。しいて類例を捜せば、遼東半島の宮城子埧室墓（文献11）出土の多数の小孔を穿った二種類の土器が挙げられる。図13—1（第1号墓出土）はつまみの付いた蓋のようであるが、どのような器に伴ったかは不明。2（第2号墓出土）は甗の明器と思われる。

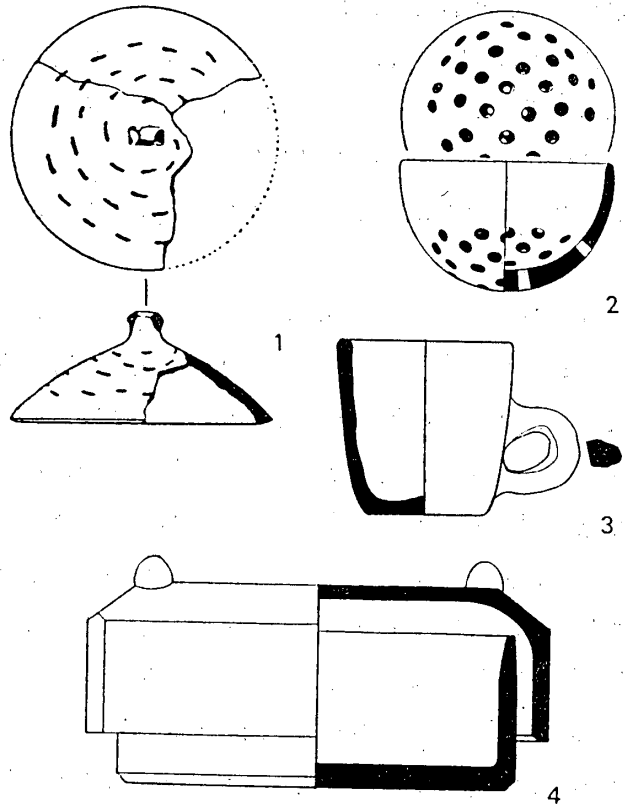


図13 宮城子埧室墓の副葬土器（約1/4）

（8）箱状の土器破片（図14，図版9—2）

表面・断面とも少し青みがかった淡い灰色である。表面はナデによって仕上げられている。残っている二長辺は平行ではなく、やや拡がっている。平面が長方形に近い箱のようなものかと思われる。この土器も性格は不明である。

類似するものには、漢墓に副葬された方盒がある。陶製の方盒は各地の漢墓から出

土している。楽浪郡地域での出土は報告されていないが、遼東半島の埧室墓からは出土例がある（図13—4）。ただ土城出土のこの土器は通常の方盒に比べるとかなり歪んでいる。

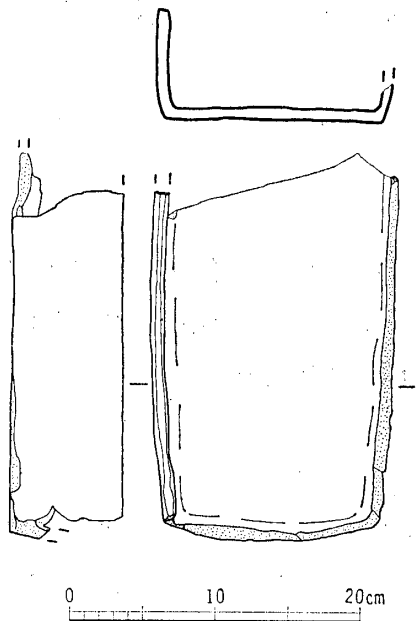


図14 楽浪土城址出土の箱状の土器（1/6）

（9）有脚土器破片（図15，図版9—4，5）

図15—1～4は小片であるが、直径16～22cmの円筒形の体部をもつと見られることから、普通「奩」「酒尊」と呼ばれる図16のような三足器の破片と考えられる。色調には差異はあるがいずれも灰色である。脚部の調整は、1と3は主に篋削りであり、2と4は指ナデと指押さえである。

陶製の円筒形三足器は漢墓の副葬品として一般的なものであり、楽浪郡地域でも南浦市大安市の台城里第12号墓（文献14）で出土している（図16）。このような土器は青銅器や漆器の酒器・食器を模した埋葬用の明器とされているが、これが土城から出土することは注目に値する。

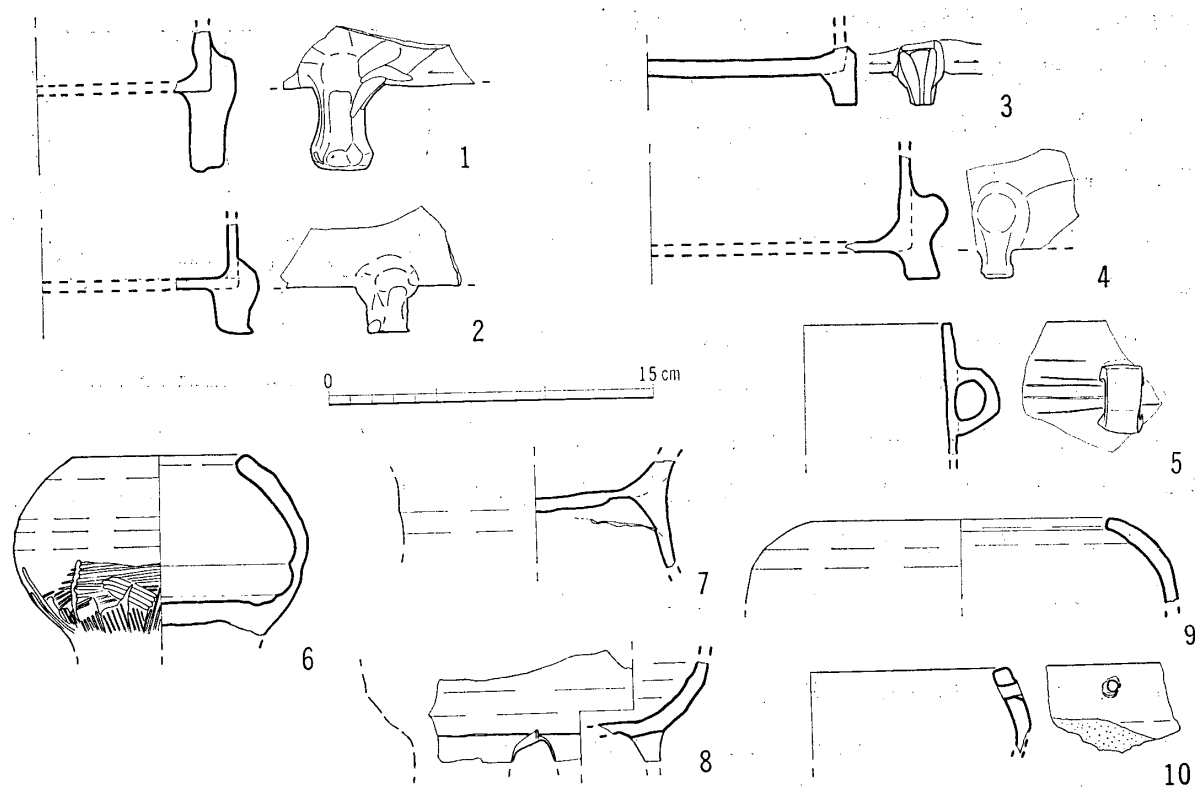


図15 楽浪土城址出土の有脚土器・その他（1/4）

（10） その他の土器の口縁部破片（図15）

図15—5（図版9—6左上）は把手付きの口縁破片である。表面は灰褐色、断面は灰色である。把手の各面は篋削りされている。

6（図版9—3）は表面が灰褐色、断面が灰色である。脚をもつ器の上半部と思われる。口縁部の内外面は回転ナデ調整されているが、内面の底には不規則な指ナデ痕が残っている。外面下半には粗いハケ目のような擦痕がある。失われた部分との接合面には軒瓦のカキヤブリのような篋の切り込みがある。

7、8は6と関連すると思われる破片である。7は表面・断面とも灰色である。外面には回転ナデ調整が施され、脚部内面には粘土紐の継目がある。8（図版9—6中央）は表面が黒灰色、断面は表層が灰褐色、中心部が濃灰色である。これも回転ナデ調整されている。脚部は焼成前に器壁の一部が切り取られており、透かし窓があった可能性もある⁴⁾。切り取りは破片の3箇所認められる。その間隔からみて、切り取り部分は本来は5箇所であったものと推定される。

9、10は内傾する口縁で、6よりはかなり大きい。9（図版9—6右上）は灰色、回転によるナデ調整を受けているが、口縁外面には叩き目の痕跡が残っている。10は明るい灰褐色。調整は9と同じだが、焼成前に内側から穿った直径4mm程の穴がある。

小 括

図15—5は筒杯に把手を一つ付けた卮かと思われる。

陶製の卮は漢墓の副葬品に見られ、楽浪郡地域の墓葬からの出土は報告されていないが、遼東半島の営城子塚室墓はじめ各地の漢墓から出土している（図13—3）。墓葬の副葬品の卮は一般に漆器を模した明器と解されているが、この土城出土品を同様に解してよいかどうかは問題であろう。

図15—6～8は香炉かとも思われるが、土器内面に煤のようなものは見出せない。あるいは豆の一種かも知れない。8は脚部に透かし窓があった可能性があり、王光墓出土の木製の豆（文献2）や遼東半島の営城子塚室墓出土の脚部に三角形の透かし窓を開けた灯（文献11）との関連が考えられる。

図15—10は図7—1、2のような鉢であったのかもしれない。

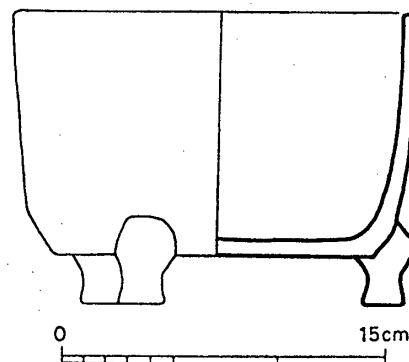


図16 台城里古墳群出土の有脚土器（1/4）

(11) 大型の盆・甑の口縁部破片（図17～19）

図17—1（図版10—2）は表面・断面とも灰褐色である。口縁の形態、焼成などは図9—1の甑に近い。粘土紐を叩き技法で成形している。破片内外面の上半分は回転ナデ調整されるが、外面にはナデ痕の下に縄目が残っているところがある。ナデの施された上半部と縄目の交錯する下半部の境目には、縄目とナデ痕の上に別の叩き板による叩きを加えられている。内面の下半部には当板痕があり、当板に刻まれていた紋様がかすかに写されている。別々に成形した上半部と下半部を接合して作った可能性がある。

2（図版10—3）は焼成が良く、表面・断面とも灰色でかなり硬質である。内外面上半部は回転ナデ調整され、下半部には縄目の叩き目と当板痕がみられる。上半部のナデ痕と下半部の叩き目の境では、ナデ痕の上から叩きを加えられている。

3は灰色軟質の土器である。外面上半部は水平方向にナデられている。下半部はまず縄目が打擦されたあとさらに太い平行の凸線を浮きださせた叩き板で打擦している。内面上半部はナデ痕の下に横方向の縄目が残っている。内面下半部にはハケ目のような擦痕がつけられている。

4（図版10—4）は灰色の土器。外面は水平方向のナデ調整であるが、内面には浅い沈線による斜格子紋が描かれている。

図18は口縁が水平に外反するもののうち最大のもので、口径は56cmであるが、器壁は8mmほどしかない。表面は焼成時に煤が付着して灰黒色となっているが、断面は灰色である。胴部は縄を巻いた叩き板による叩きによって成形され、回転ナデ調整されている。現存する胴部の下端にはナデ調整の後にさらに叩きを加えており、平行条線状の別の叩き目の痕跡がある。

図19には口縁が水平に折れて外反する口径40cm前後の口縁部破片を集めた。盆、甑の類であろう。23以外は内外面とも回転を利用したと思われるナデ調整で仕上げられているが、外面にはナデ

楽浪土城址出土の土器（中）

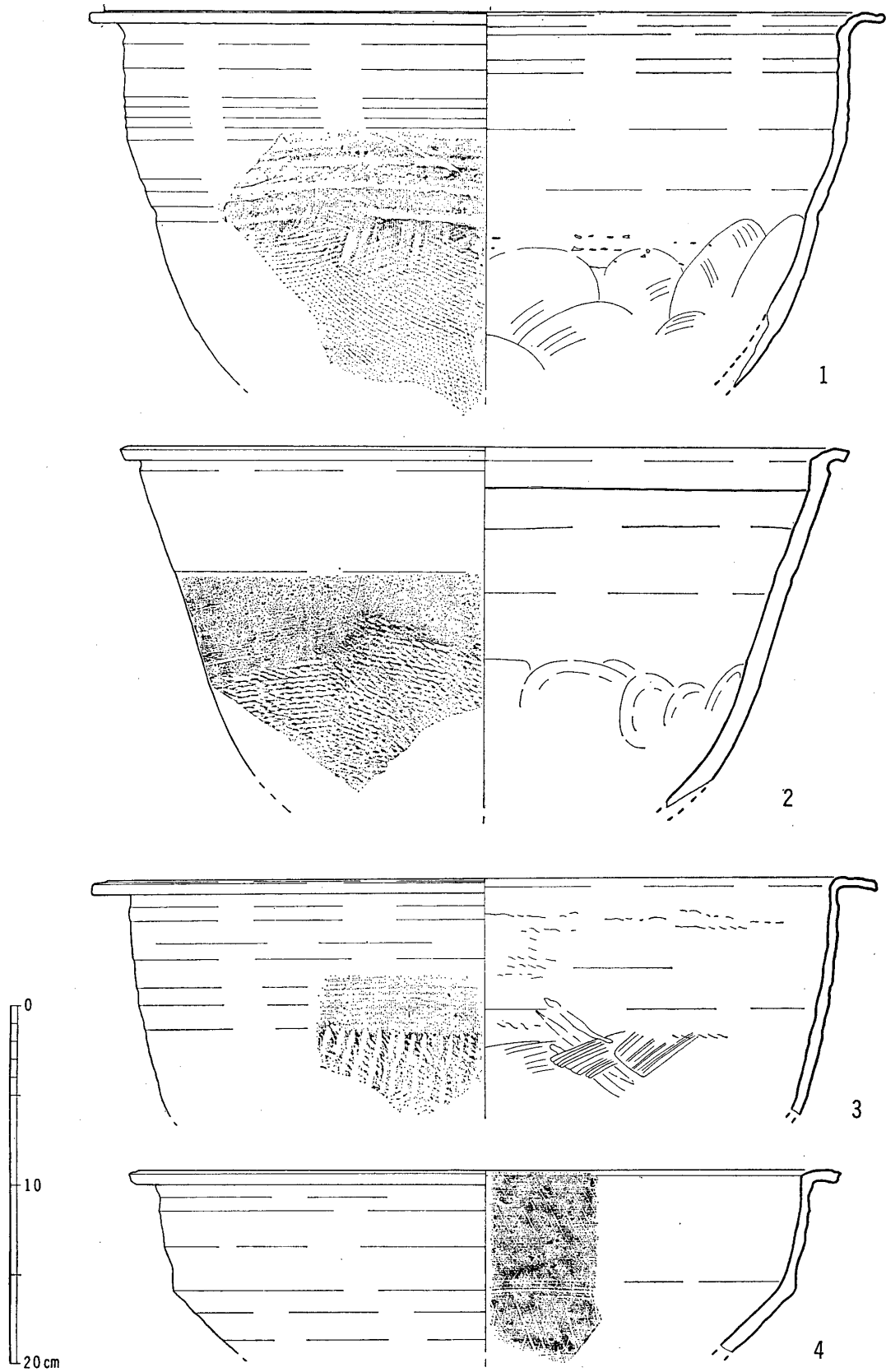


図17 楽浪土城址出土の盆類（1/4）

痕の下に縄目の叩き目が残っているものがある。

図19—1, 2は表面・断面ともに褐色で、水平の口縁上面に加工がなされている。口縁部の形態と焼成は図11—1の甗に類似する。

3の表面内は面灰色、外面は剝落して本来の色は不明。断面は明るい灰色である。4は表面灰色、断面は中心部が濃灰色、周辺部が灰白色。

以下5～21は明暗に差はあるがいずれも灰色系の色調である。Aトレンチ出土のもの（8, 11～15）には口径35cm 前後のやや小ぶりのものが多い。22（図版10—5）は雲母の微粒子を含むやや粗い胎土の土器である。表面は灰色、断面は褐色で、質感は他の土城出土土器とは異なる。23は表面が灰黒色、断面が灰色である。口縁と内面は丁寧に横ナデされるが、器側面は軽くナデただけで、縦方向の擦痕が消されずに残っている。

小 括

以上の口縁破片の土器の完形品は図9・図11の盆・甗や楽浪郡地域の墳墓の副葬品にみることができる。おおむね漢代遺跡に普遍的な器種と言ってよい。ただ23は口縁の形態や胴部の調整を他と異にする。

図19—4に類似した口縁の破片は福岡県糸島郡前原町三雲遺跡番上Ⅱ—5地区で弥生時代中期の土器を含む層から発見されている（文献11, 図139—20）。

(12) 罐の口縁部（図20～22）

日本考古学でいう「壺(広口壺)」の類である。口径十数cm から50cm 近いものまでである。

図20—1～4は口径、推定高ともに10cm 余りの小型の罐である。1（図版11—1左上）は表面・断面とも灰色。内外面は回転ナデ調整されているが、側面下部には縄目が打擦されている。2（同図版右上）は表面・断面とも灰色、やや硬質である。3（同図版右中）はわずかに褐色がかった灰色。口縁部外面には、ナデ痕の下に叩き目の痕跡と思われる右下がりの細い凹線がかすかに残っている。4（同図版左中）は表面が灰黒色、断面が灰褐色である。

6（図版10—6）は表面・断面とも明るい灰褐色である。下腹が張る。粘土紐を積み上げ、叩き板と当板で成形したのち轆轤で口縁部と頸部を仕上げている。胴部外面の調整は縄目の叩き目を篋で軽くナデただけで、縄目と篋の擦痕が残っている。胴部内面は横ナデ調整されるが、頸部と胴部の境には粘土紐の継目がはっきり残っている。

5は表面・断面とも明るい灰色である。7（図版11—1）はやや明るい灰褐色の軟質土器。肩部

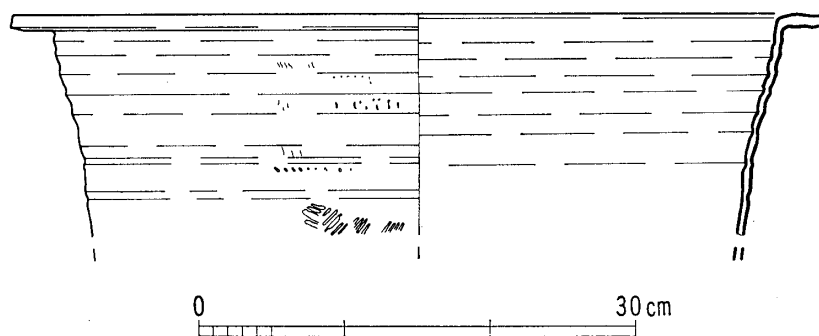


図18 楽浪土城址出土の大型盆 (1/6)

楽浪土城址出土の土器 (中)

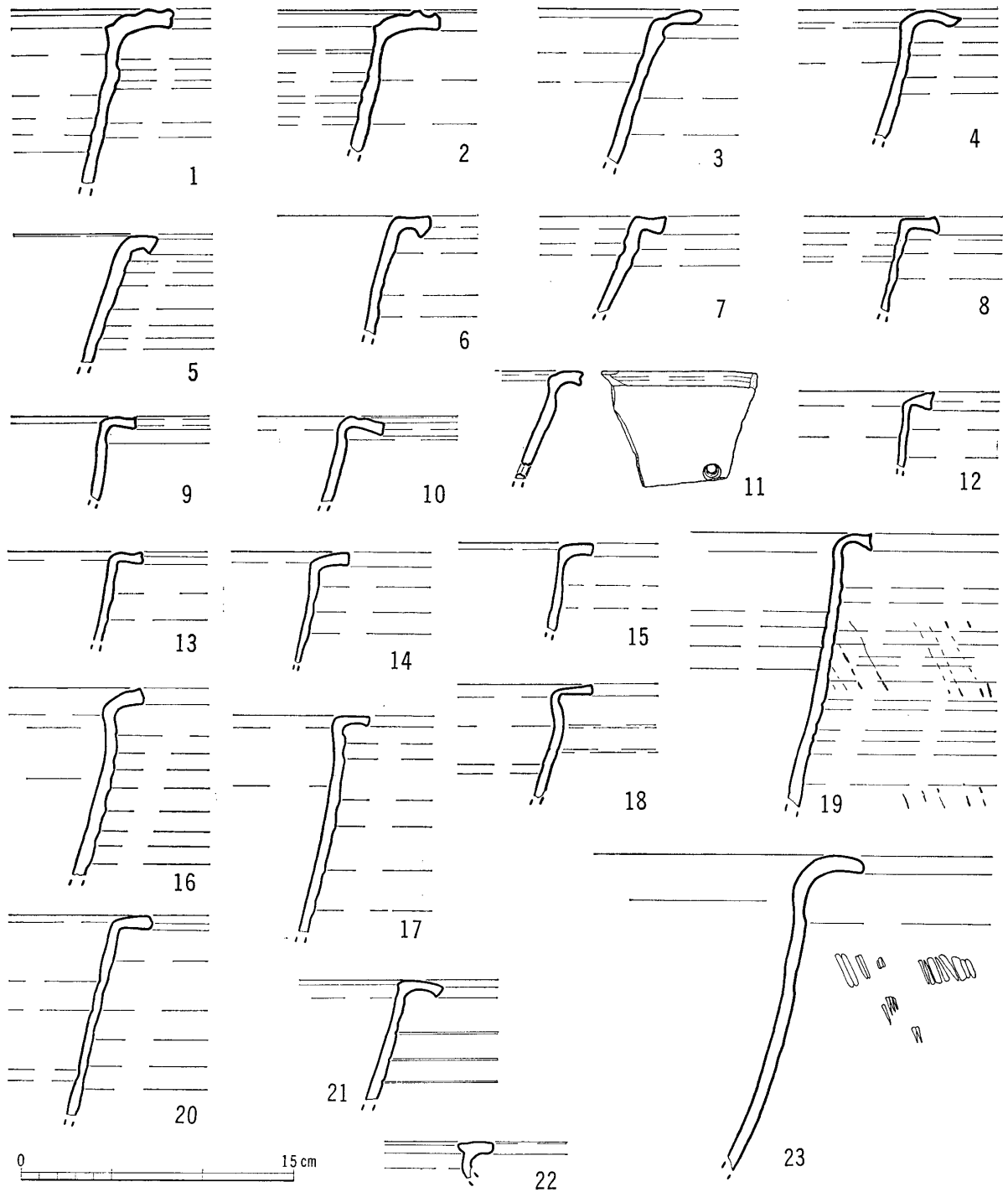


図19 楽浪土城址出土の盆類口縁部 (1/4)

にはナデ痕の下にかすかに縄の叩き目が残る。9は表面が褐色から灰褐色、断面は表層が褐色で中心部が灰色である。肩部には縄の叩き目がある。

11 (図版11-1 右下) は表面・断面ともやや暗い灰色、胎土がやや粗く、焼成も他とは異なる。口縁外面にはナデ痕の下に叩き目らしい痕跡が残る、肩部には幅8.5mmの歯車状の工具を回転させてつけたと見られる紋様がある。この紋様の下には直径2cm弱の、なにか貼り付けたものが剥

谷 豊 信

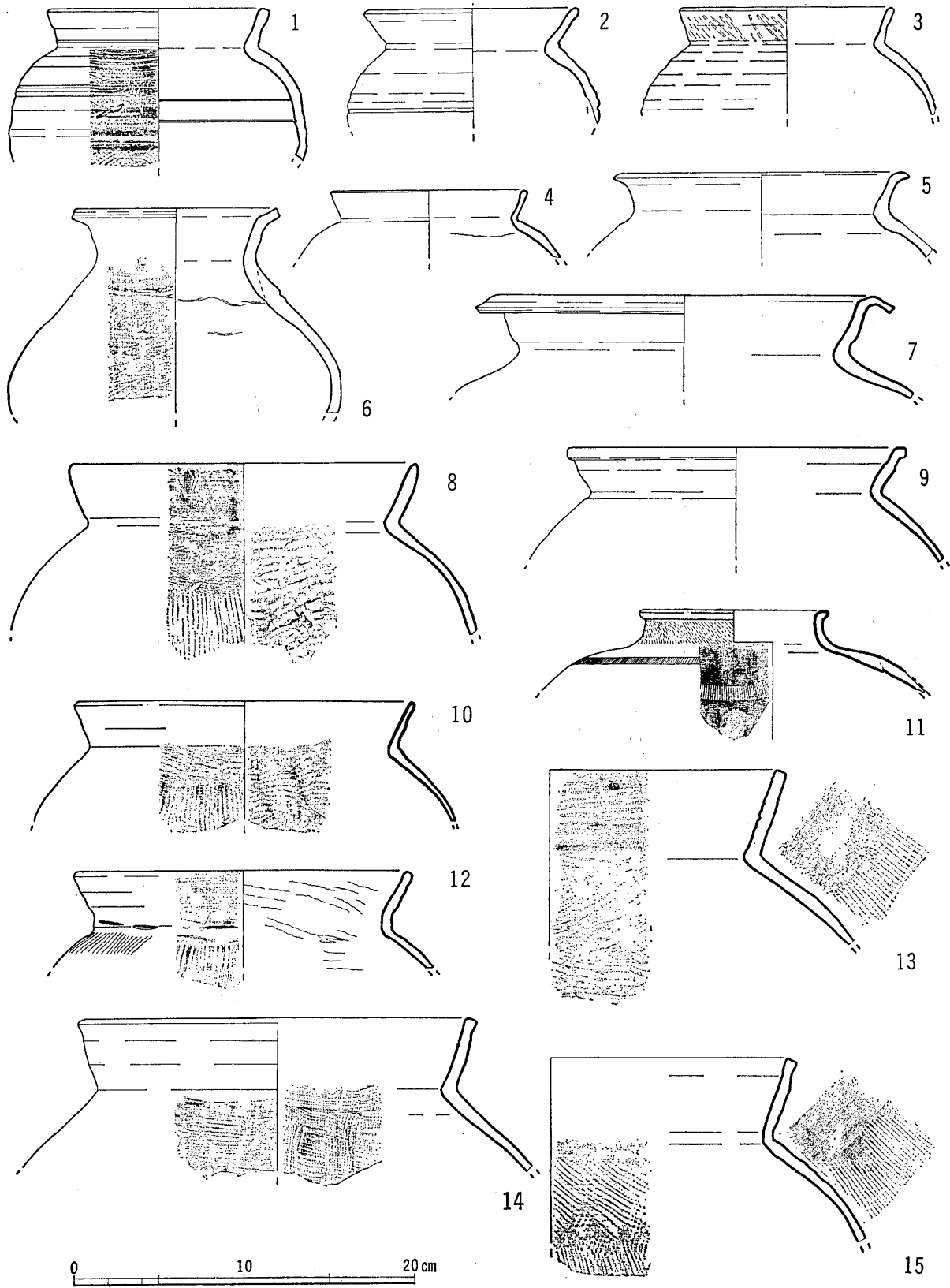


図20 楽浪土城址出土の罐 (1/4)

楽浪土城址出土の土器 (中)

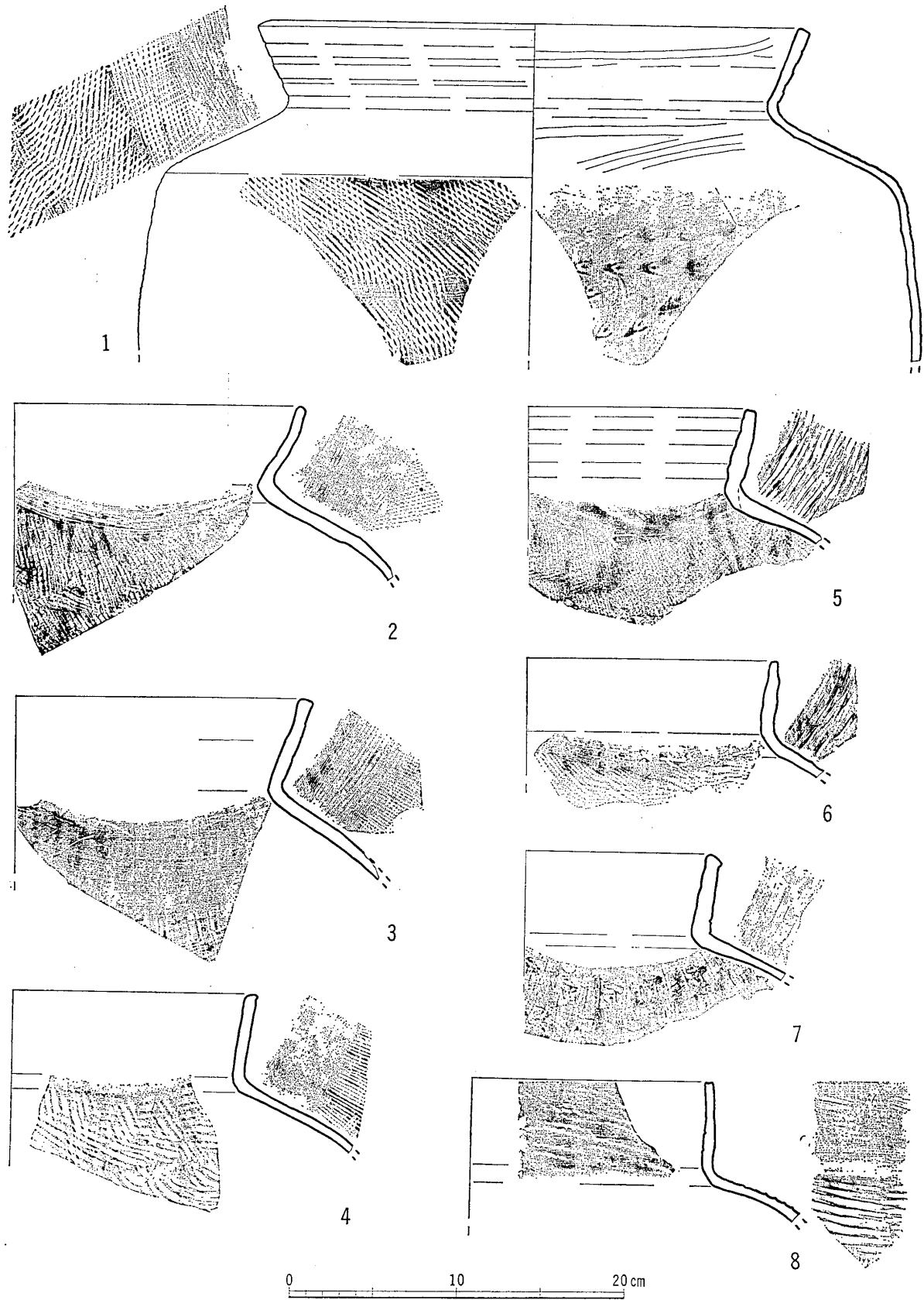


図21 楽浪土城址出土の罐 (1/4)

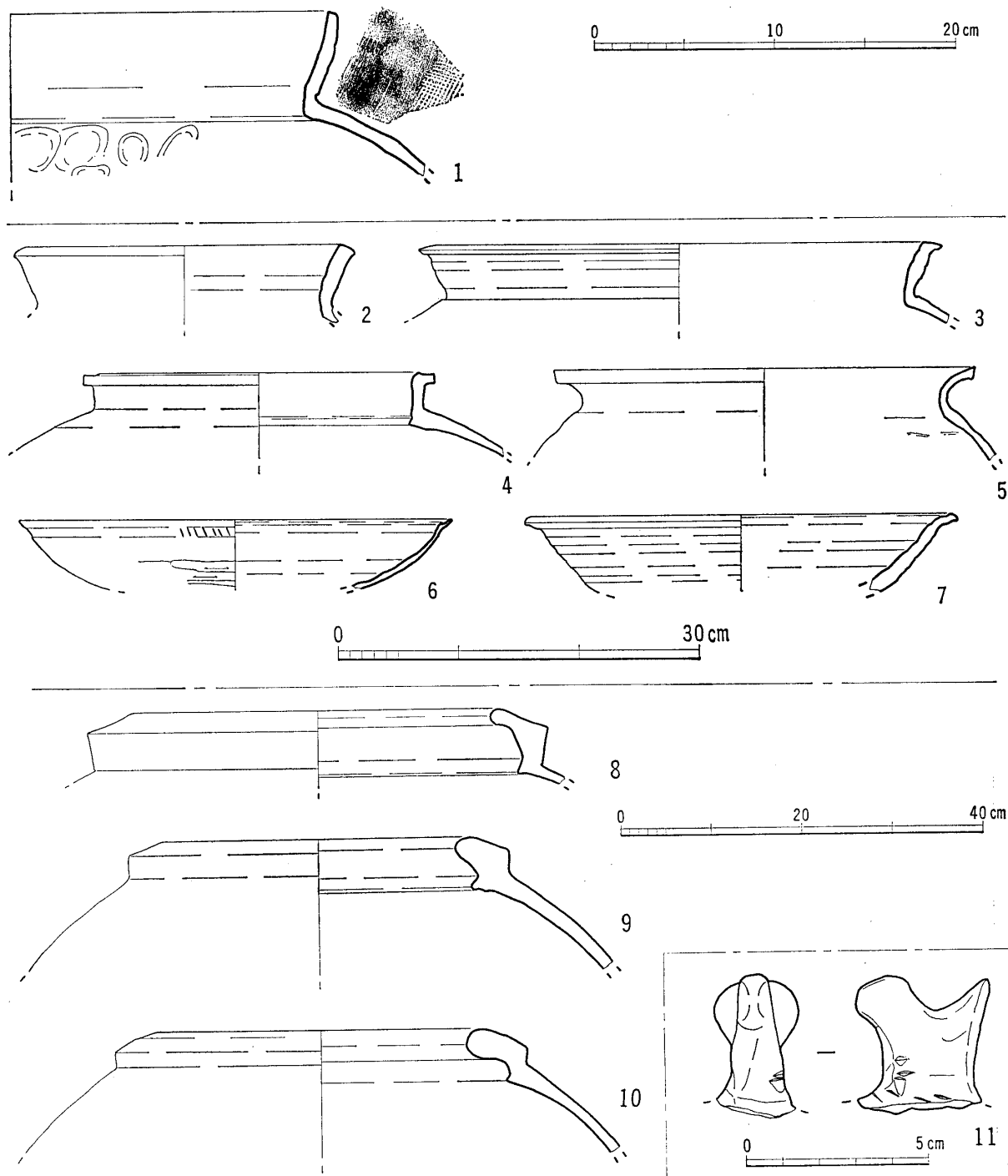


図22 楽浪土城址出土の罐 (1/4, 1/6) 盤 (1/6)・甕 (1/8)・鳥形つまみ (1/2)

がれた痕跡がある。本来は突起か把手のようなものが付いていたのかも知れない。

図20—8, 10, 12~15は口径 20~30cm のなで肩の罐と思われる。

8 (図版11—3下)の表面は黒色であるが、断面は灰色である。肩部の下半には縄の叩き目、上半には細かい条線を浮き出させた叩き目があり、内面には当板痕が見られる。口縁部は回転ナデ調整であるが、外面には縦方向の、内面には横方向の縄の叩き目がかすかに残っている。10 (同図版

楽浪土城址出土の土器（中）

中), 12 (同図版上) はともに暗灰色で, 大きさ, 製作技法は8 とほとんど同じである。

13~15は口径が二十数 cm のなで肩の罐である。いずれも灰褐色系統の土器で製作技法は上述のやや小型の罐と同じである。

図21, 図22—1 は口径が 30cm 前後, やや大型で肩が張る罐である。

図21—1 (図版13—1) は表面が灰色, 断面が明るい灰色である。大きさの割に器壁は薄く, 6 mm内外の厚さしかない。焼成はやはり軟質である。口縁部は回転利用のナデで仕上げられているが, 外面のところどころに縄の叩き目の痕跡が残る。肩部以下には叩き目と当板痕がある。肩部上半に細い平行の条線が, 肩から胴にかけて縄目が打捺されている。内面の当板痕も二種あり, 肩の部分には図20—10の内面の当板痕と類似するものがかすかに残り, 胴部内面には, 中心に凸点を持つ菱形のような紋様が圧印されている。

2 (図版12—4), 3 (図版12—6), 4 (図版12—1) は当板痕以外はほとんど同じといってよい。表面は灰色, 断面は濃灰色である。

5 (図版12—2) は表面・断面とも濃灰色。肩部にやや太い条線の叩き目を持つ。内面の当板痕の紋様が他より細かい。6 (図版12—5) は暗灰色の土器。これも肩の叩き目の線が太い。7 (図版12—3) は灰褐色の土器で, 肩部内面の当板痕は一部破損した格子目の当板を用いたものと思われる。8 は表面が灰褐色, 断面は中心部が灰色, 表層が灰褐色の土器, 横ナデされた口縁の外表面には縦方向の縄目が, 内面には横方向の縄目が残っている。肩部の内面は平滑である。

図22—1 は表面・断面とも灰色。口縁部と肩部上半は回転ナデ調整される。肩部下半の外表面には縄目の叩き目がつき, 肩部内面は指押さえ痕のような窪みが並んでいる。

図22—2~5 はやや大型の罐の口縁である。2 (図版11—2上) は灰色軟質で 1.5cm 厚とやや厚い。3 (同図版下) は表面と断面表層が明るい灰色, 断面中心部が灰色である。外面にはナデ痕の下に縦方向の叩き目がかすかに残り。4 (同図版中) の表面はやや青みがかった薄い灰色, 断面は表層が灰褐色で中心部が明るい灰色である。肩部は回転を利用して篋削りされたようである。5 (図版13—3) は, 完形を知りえないが, これまで紹介した土器とは器形が異なる。表面・断面とも明褐色, 胎土はやや粗く白色の砂と雲母粉をふくむ。

小 括

図20—1~4 は楽浪郡地域の木槨墓, 埴室墓の副葬品にもよく見られる小型の罐である。11は器形, 肩部の紋様などからみて漢代の土器としておかしくはないが, 土城出土品にはほかに類例がなく, 焼成もことなる。製作された地域または年代が異なるのかも知れない。図20—8, 10~15, 図21, 図22—1 はおおむね同じ技法で作られており, E' トレンチ出土のものが多い。図21, 22に示したような大型薄手の罐は, 楽浪郡地域の墓葬の副葬品には見られない。

これらの罐に類似する土器片が北部九州の2箇所で発見されている。福岡県糸島郡前原町三雲遺跡番上Ⅱ—5地区の土器溜状遺構の弥生後期を主体とする層から, 同一個体とも思われる口径20cmの罐の口縁部破片が2片発見された(図23—1, 2)。胎土の質および製作技法は土城出土品とほぼ

同じである(文献12)。また同じ糸島郡の志摩町御床松原遺跡の包含層第3層上部から罐の肩部の破片が出土している。図23—3に示すように外面の叩き目は土城出土の中・大型の罐と一致し、「内面はナデて仕上げている。色調は黄色を呈し、焼成は軟質にして不良である」という。第3層は「弥生時代中期後半から終末までの土器でとりわけ中期後半～後期前半までの土器は夥しい量である。(中略)他に、縄文土器、漢式土器、鉄器、石器、玉類等もかなり出土した。また、古式の土師器も数点検出されたが、この時期の何等かの遺構が存在した可能性があり、混入品と思われる。」という(文献1)。弥生時代中期後半から後期にかけてこの種の罐も北部九州に搬入されたことが確認される。

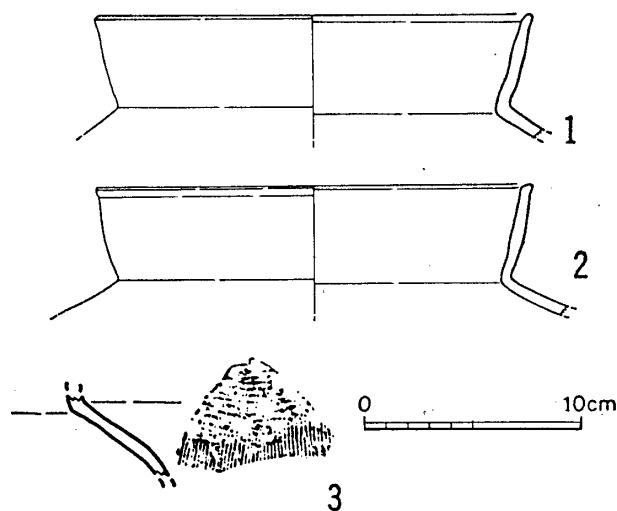


図23 北部九州出土の楽浪系罐 (1/4)

(14) 盤(?)の口縁部破片(図22)

6はやや褐色がかかった灰色の土器。口縁部が蓋受けのようになっている。側面下半は横方向に篋削りされる。7は表面が灰色、断面は表層が灰褐色で中心部が灰色である。

(15) 甕の口縁部破片(図22)

8～10は球形の甕の口縁である。8は表面が灰色、断面が明灰色である。外面には前面に横ナデ痕がつく。9は表面と断面表層が灰褐色、断面中心部が灰色である。白色砂を少量含む。10(図版13—2)は表面と断面表層部が明るい灰色、断面中心部は濃灰色である。

類似した口縁を持つ厚手大型球形の甕は、楽浪郡地域の木槨墓・埴槨墓の副葬品として少なからず出土している。

(16) 鳥形つまみ(図22—11, 図13—4)

灰褐色軟質で、土器の蓋の鈕であったかと思われる。手づくねであるが、所々に篋先が当たったような痕跡がある。これとよく似た鳥形つまみが一つ付いた蓋は平壤市の石巖里第99号墳から(文献6)、二つないし四つ付いた蓋は貞柏洞23号墓から(文献17)出土している。いずれも埴室墓である。

(17) 土器底部破片(図24・25)

図24—1は表面・断面とも灰色。胴部下半は篋削りされ、底部には静止糸切り痕が見られる。土

楽浪土城址出土の土器（中）

城出土品では珍しい器形である。2は明るい灰色、側面下部が縦方向に篋削りされ、さらに側面と底部の境が面取りされている。底部は静止糸切りされたのち篋で削られている。器壁の厚さは1cm強でやや厚手である。3は表面と断面表層が灰褐色、断面中心部が灰色である。表面の痕跡から、叩きののち回転を利用してナデ調整し、その後側面下部を篋削りしたことがうかがえる。底部は静止糸切りののち篋削りしているようである。図9—1のような盆の底部であろう。5は灰青色でやや硬質の土器である。胴部の下部に篋削り痕が、底部に削りによる擦痕が見られる。6は灰色の土器。底部には静止糸切り痕が残り、側面と底部の境は面取りするように横に篋削りされる。5、6は盆か罐の底部であろう。

4、7～10は図17～19の盆の底部と思われる。4は表面がやや緑がかった灰色、断面は表層が褐色、中心部が灰色である。外面には縄目の叩き目が交錯しているが、胴部に一条縄目を磨り消した線がめぐる。内面には指押さえ痕がある。7（図版23—6左下）は外面がやや緑がかった灰色、内面が黒灰色、断面が薄い灰褐色である。外面には縄目の叩き目が、内面には当板痕が圧印される。8も同様の破片。表面外面は灰褐色、内面は黒灰色、断面は灰褐色を呈する。9は表面・断面とも灰色でやや硬質、比較的胴径の大きな土器の底部であろう。10（図版13—6左上）は表面が灰褐色、断面は表層が灰色、中心部が濃灰色となっている。底部内面には沈線が格子状に引かれている。

図25—1は表面・断面とも灰色、側面下部は横方向に、底部は不規則に篋削りされている。2も質と調整手法は同じ。

3～5は小型の罐の底部であろう。3は灰色で胎土は精良である。側面は細かく篋削りされ、底部には静止糸切り痕が見える。内面は回転による粗い擦痕が水平につく。4も灰色の土器。側面下部は横方向に篋削りされる。底部の擦痕は回っており、回転篋削りと推定される。土城出土土器では珍しい例である。5は表面がやや緑がかった灰色、断面は灰褐色を呈する。側面下部と底部はあらく篋削りされる。これらの小型の底部に対応すると思われる口縁部は土城出土品にはない。

6は罐の肩部によく似ているが、復元してみると極めて小さな口縁部を想定しなくてはならないので、罐の底部である可能性があるものとして図示した。表面外面は灰褐色（一部褐色）、内面は半分が赤褐色、半分が灰褐色、断面は灰色である。

7は表面外面が灰褐色、内面と断面が灰色である。側面下部が篋削りされ、底部には静止糸切り痕が見える。8（図版13—6右上）、表面が黒灰色、断面は表層が褐色、中心部が濃灰色である。破片の上端は横ナデされ叩き目は消えている。7・8ともに図20—1～4のような口縁に対応する小型罐の底部であろう。

9は外面が灰色、内面と断面は薄い灰色である。製作技法は7とほとんど同じだが、罐ではなく、平壤市の石巖洞古墳副葬品（文献9）に見られるような、水平に折れ曲がる口縁を持つ盆であった可能性もある。

このほかにも底部小片は10点ほどある。

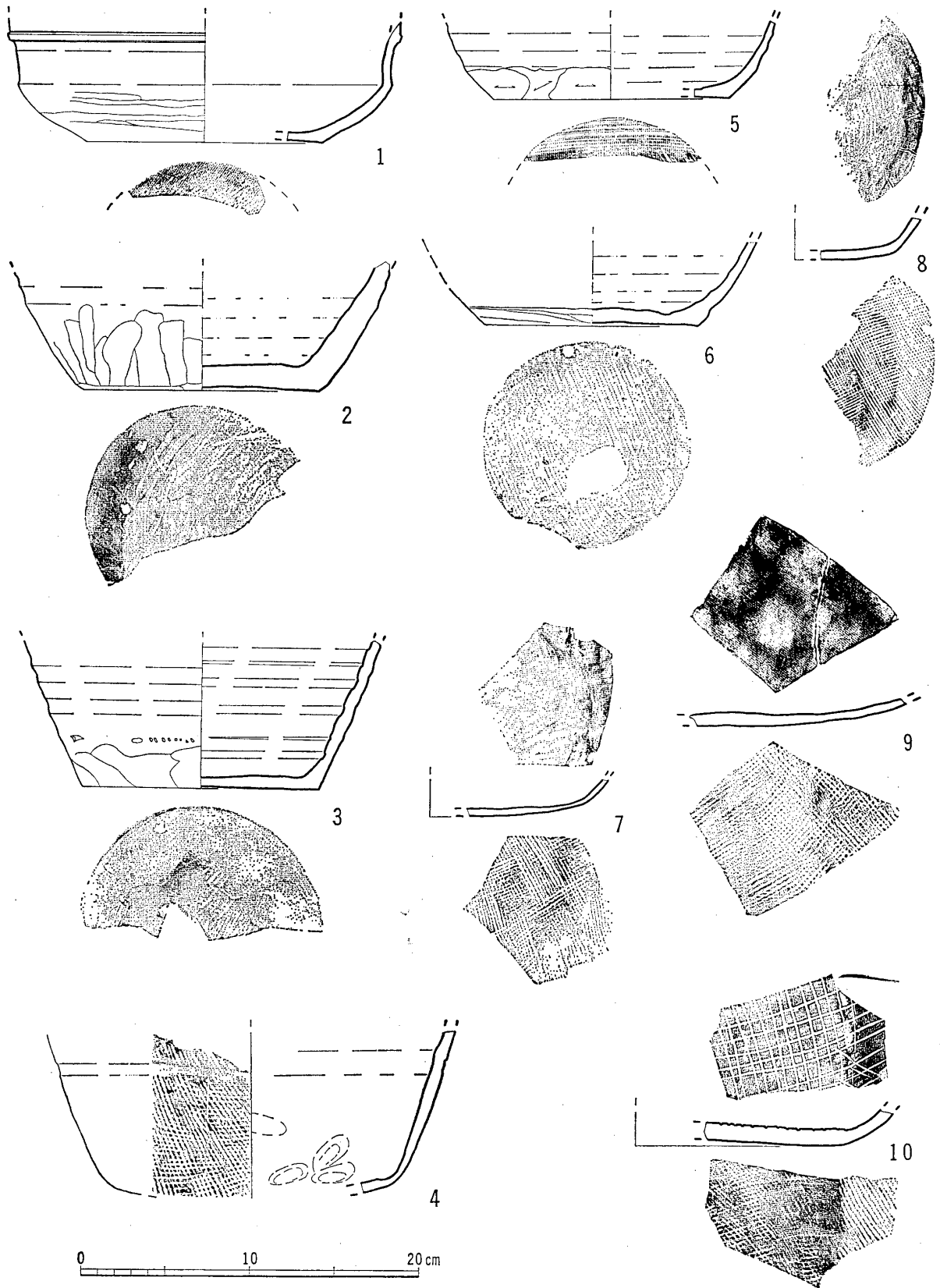


図24 楽浪土城址出土の土器底部破片 (1/4)

楽浪土城址出土の土器（中）

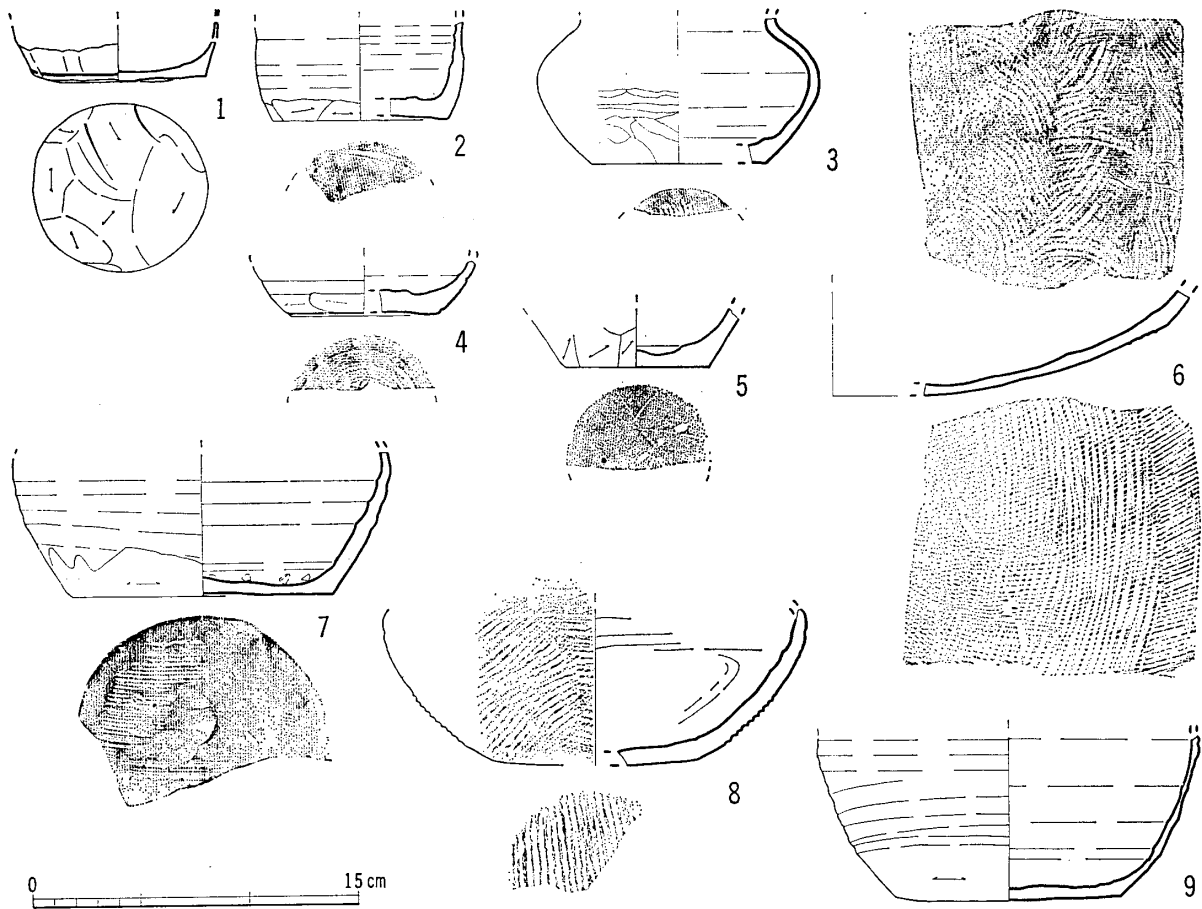


図25 楽浪土城址出土の土器底部破片（1/4）

小 括

本研究室に保管されている土城出土の灰色系軟質土器の底部の形状は、(a)胴部と底部の境が稜をなすもの、(b)胴部と底部の境が半径の小さい弧をなし、底部はゆるく突出するもの、(c)胴部と底部の境は弧をなすが底部は上げ底気味にへこむもの、とに分けられる。

(a)は小型鉢、鉢、盤、盆、甑、罐に見られる。底面に静止糸切り痕を残し、胴部の下半を篋削りするものが多い。底面の糸切り痕は轆轤の使用を物語るが、回転糸切り痕を残すものがない⁵⁾ こと、胴部下半の篋削りには轆轤の回転を利用せず、静止状態で一部分ずつ削っていることが特徴である。(a)の底部を持つ土器で外面に叩き痕が明瞭に残っているものはないが、ナデ痕の下に縄目の痕跡が残っているものがあり、叩きによって成形されたものもあることは明らかである。

(b)は盆、甑と罐の一部に見られる。外面には縄目の叩き目、内面には同心弧とでもいうべき当板圧痕が見られるのが普通である。(b)の底部を持つ土器も、口縁部から胴部上半にかけては回転ナデ調整で仕上げられているが、土器上半のナデ調整部分と土器下半の縄の叩き目の部分の境は、ナデの後に叩きを加えたことが判るものがあり、土器の上半と下半を別々に成形したのち、叩き技法で接合したものもあることがうかがえる。

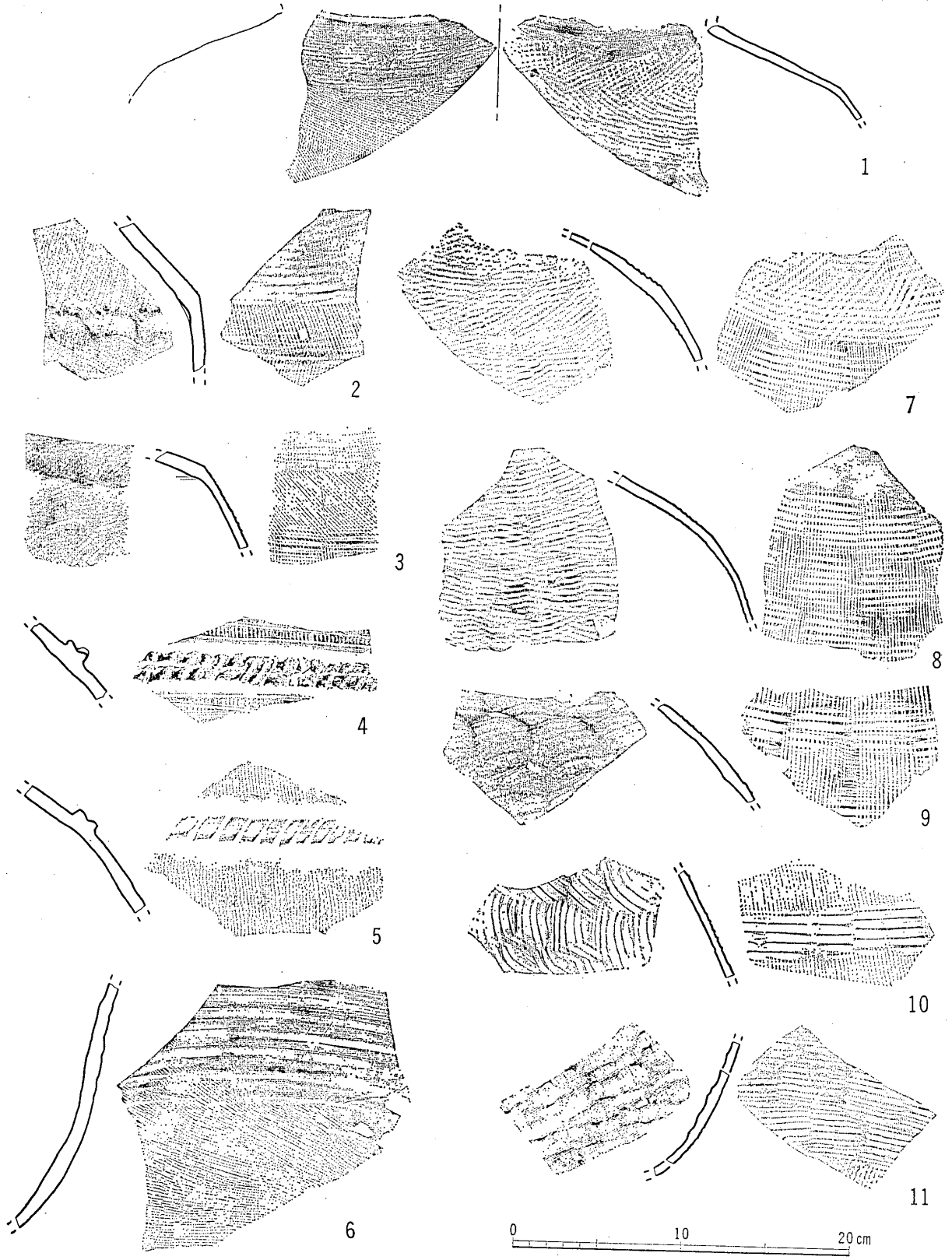


図26 楽浪土城址出土の土器胴部破片 (1/4)

楽浪土城址出土の土器（中）

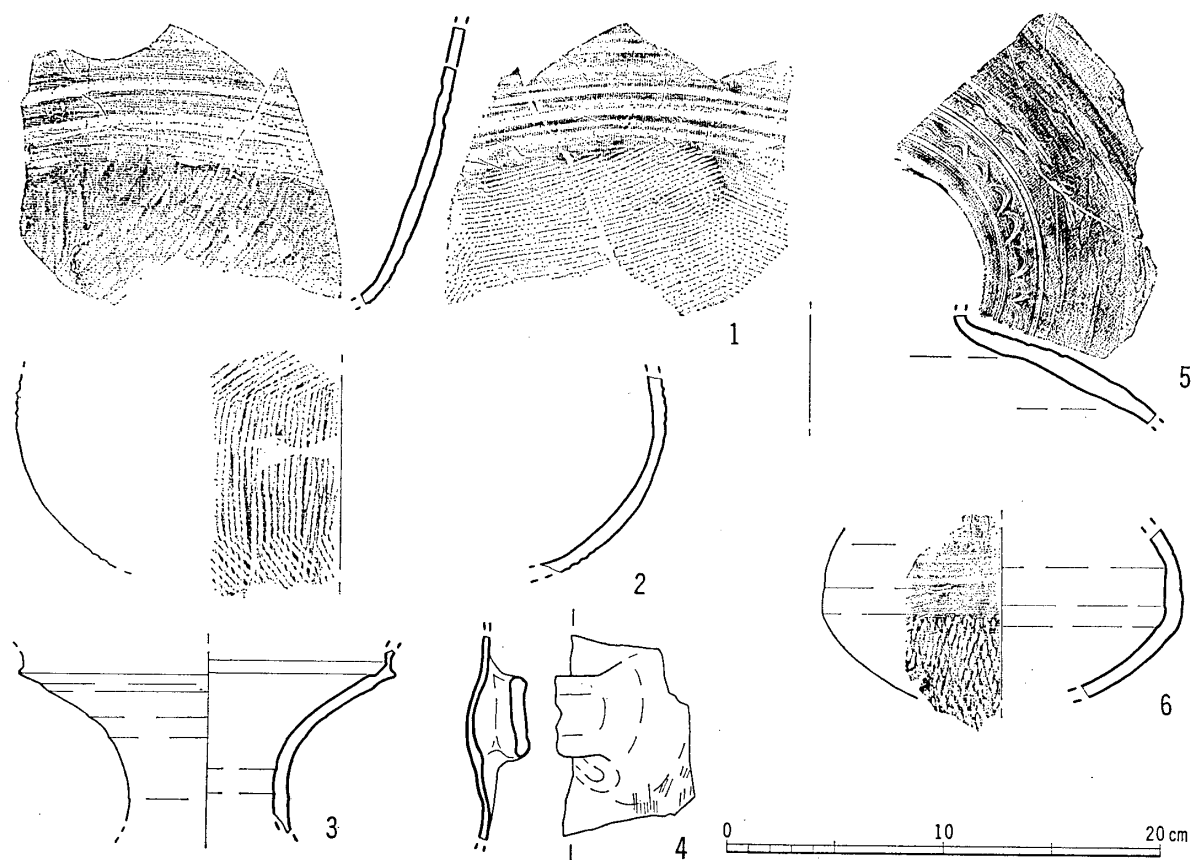


図27 楽浪土城址出土の土器胴部破片（1/4）

(c)は少なく、器種が明らかなのは図12—3の甕だけである。

本研究室の資料には確実な例はないが、罐の一部には丸底のものもあったことが後述の胴部破片や墳墓出土例から想像される。また甕の底部も丸底に近かったことが墳墓出土の甕から推定される。

(18) 土器胴部破片（図26・27）

図26—1（図版14—1）は表面が灰褐色、断面が灰色の罐の肩部破片である。大きさ、叩きなどは図21の罐とほとんど同じである。2の表面は焼成時の煤の付着で灰黒色となり、断面は表層が灰褐色、中心部が灰色である。図の上下は逆かもしれない。外面は細かい縄の叩き目の上から更に平行条線を刻んだ叩き板で打捺している。内面にはハケ目を思わせるような細かい当板痕がつけられ、胴部と肩部の境には指押しえ痕がある。3（図版14—3）も2とほとんど同じである。

7, 8は表面・断面ともに灰褐色、製作手法・焼成から見て同一個体とも考えられる。とすると7は上下逆で図25—6のような底部であったかも知れない。共に外面は縄目の叩き目の上に平行条線の叩き目を打捺している。8（図版14—2）の上部は叩き目が磨り消されており、この先に口縁が付くのであろう。内面には当板痕がつけられている。9, 10（図版14—6, 7）も上下は確かでない。9は明るい赤褐色、10は暗い灰褐色である。ともに外面には縄の叩き目の上に平行条線の叩き目を打捺する。内面には土城出土土器では一般的な当板痕がつく。

4, 5 (図版14—4, 5) は凸帯をつけた珍しい例である。ともに図の上下、傾きは確かではない。4の表面は灰色、断面は灰白色を呈する。外面を縄目の叩き板で打捺したのち幅2cm弱、高さ5mm程の粘土紐を貼り付け、その上面を布を巻き付けた径5mm位の棒状のもので押している。また外面の縄目の上に幅2mm程の篋先で横方向に縄目を磨り消している。内面はやや凹凸があるのみである。5は表面・断面とも灰白色。外面に縄目の叩きを施したのち幅1.8cm、高さ6mm程の粘土紐を貼り付け、その上面に斜めに数mmから1cmの間隔で切り込みをいれている。内面はかなり剥落しているが、ナデ調整されたものと思われる。

6は表面が暗灰色、断面が灰白色である。外面上半は回転を利用したナデ調整、下半は縄目が打捺される。打捺はナデの後にも行われている。11は灰色の土器、外面の大部分には平行条線の叩き目が見られ、一部に縄の叩き目も見える。内面は凹凸の深い当板痕が圧印されている。図27—1は灰色、内外面とも上半は回転利用のナデ調整、下半は縄の叩き目と当板痕である。これらは盆または甑の胴部であろう。

図27—5 (図版14—9) は罐の肩部である。灰色で胎土はやや粗い。内外面を回転を利用してナデ調整したのち、外面に櫛のようなもので同心円と波状紋と長さ数mmの弧を描き、その後口縁から5cm以上離れた部分を横方向に篋削りしている。このとき紋様部分も部分的に削つてしまっている。

図27—2, 6は小型の罐の胴部である。2は外面が灰褐色、内面と断面が灰色である。外面には縄目の打捺紋があるが、内面は平滑に仕上げられている。6は表面が淡褐色、内面と断面が灰褐色である。外面は上半が横ナデ調整、下半は縄目の打捺、内面はナデ調整である。

3 (図版13—5) は上下不明。壺の頸部か、なにかの脚であろうか。表面は灰褐色、断面は灰色である。外面は回転を利用した丁寧な篋削り、内面も回転利用のナデ調整である。4 (図版14—11) は表面と断面表層が灰色、断面中心部が赤褐色である。胴部の器壁は平面に近く、本来の胴径は判らないが、薄手の割に大きなものであったと思われる。

小 括

図26, 27に掲げた土器片はほとんどが器形、質、製作技法において他の大多数の土器と共通する。図26—4, 5のような凸帯を巡らす土器は洛陽焼溝、万安北沙城などの漢代遺跡からも出土している (文献10, 13)。図27—4のような把手を持つ土器片は智塔里土城でも出土している (文献15)。図27—5のような紋様を持つ罐が平壤周辺の墓葬から出土することは早くから指摘されている (文献6)。これらのほとんどが楽浪郡時代の土器であることに問題はないであろう。ただ図25—3は外面に回転を利用した丁寧な篋削りがみられ、質もやや異なる。今後さらに検討する必要がある。

楽浪土城出土の灰色系軟質土器は、粘土紐積み上げ、叩き板と当板による叩き、回転ナデ調整を基本としている。成形時に主に用いられた叩き板は縄を巻いたものであり、口縁附近や胴部の一部に平行条線を刻んだ叩き板が補助的に用いられたようである。図26—11のように平行条線の叩き板を土器の下半の成形に用いたものは珍しい。当板に刻まれた紋様は同心弧とも言うべきものを主と

楽浪土城址出土の土器（中）

し、一部に格子目がある。土器外面に格子目紋の叩きが見られないこと、縄目の上に細い沈線を平行に何本も巡らすものは少ないこと、同心円状の当板痕も見られないことは注意される。楽浪系土器と南部朝鮮系陶質土器を区別する際の目安とすることができよう。（この項終わり）

註

1) 前稿（文献8）の訂正をしておきたい。42～43頁で

成形の基本は粘土紐積み上げである。やや大きな土器には縄の叩き目や当板痕がみられることが多く、叩き板当板技法がかなり一般的に用いられていたようである。これに対して轆轤の技術はあまり発達していなかったようである。まったくの轆轤挽きによる成形は行われなかったようであり、また糸切り底はあるが、多くは静止糸切りで、回転糸切りは稀である。整形・調整の技法としては木製の篋によると思われる削りと、回転を利用した（回転台か轆轤か判別しがたいが）とみられる横ナデが顕著である。そして一般に薄手に仕上げられている。

と述べたが、これは筆者の理解不足による不十分な記述であり以下のように訂正する。

基本的な製作技法は粘土紐積み上げと轆轤による回転ナデ調整であり、これにしばしば叩き技法が併用される。轆轤の回転を利用し粘土塊から一気に挽き上げる水挽き技法も存在した可能性もあるが、確認することは困難である。器壁は一般に薄く、5mm内外のものが多い。小型の土器は轆轤上で粘土紐積み上げや手びねりで大体の形を造り、轆轤を回転させて調整する。中型以上の土器では粘土紐を積み上げ、縄を巻いた叩き板で器壁を叩きしめてから回転ナデ調整を施したようで、ナデ痕の下にかすかに縄目の痕跡が残っていることが多い。成形した土器を轆轤から切り離す技法で確認しうるのは静止糸切りで、回転糸切りの確かな例はない。糸切りのうち、体部の下端（底部の外周）を篋削りすることが多いが、すべて回転を利用しないいわゆる「手持ちの篋削り」である。土器の外面下半部に叩き目を残している土器の製作過程は、①叩きによって全体をほぼ成形したのち上半部を轆轤上で調整する、②轆轤を使って上半部を、叩きによって下半部を作り、接合する、③轆轤上で成形し、切り離したのち下半部を叩く、などの可能性が考えられるが、個々の土器片で判断するのは難しい。

2) 各土器の出土地点は次に掲げる「楽浪土城出土土器出土地点一覧」にまとめた。発掘区については文献7参照。

3) 文献12および柳田康雄氏の御教示による。

4) 滑石混入土器には三角形の透かし窓を持つ脚の破片がある。後述。

5) 彩篋塚に副葬された罐の底面には回転糸切り痕が残っているものがある（文献4）。土城の土器に回転糸切りが見られないのは、単なる偶然でなければ、①楽浪郡地域には回転糸切りは行われず、彩篋塚の土器は他地域からの搬入品である、②楽浪郡地域でも回転糸切りは行われたがあまり普及せず、彩篋塚の土器は例外的な部類に属する、③楽浪郡地域でも回転糸切りが行われたが、楽浪土城の存続した時期には一般的でなかった、などの可能性が考えられる。この点については今後の課題としたい。

楽浪土城出土土器出土地点一覧

図6 1, D³V区; 2, B"トレンチ; 3, B"X区; 5, B"Ⅲ区; 6, EⅦ区

図7 1, F₂V区; 2, Eトレンチ; 3, Cトレンチ; 4, D区域; 6, B"Ⅶ, Ⅷ区; 7・8, E'トレンチ; 9, 「塙」と注記される。GトレンチⅣ, V区の塙築遺構かとも思われるが確かではない

図9 1, E'XⅡ区; 2, E'XⅡ, Ⅲ区; 3, D区域; 4, E'トレンチ; 5, AXトレンチ; 6, D²V区; 7, CⅦ区

図11 1・2, B"Ⅲ区

- 図12 2, EV区; 3, E'トレンチ; 4, EV区; 5, D⁴V区; 6, D²⁻³Ⅱ区; 7, D⁴I区; 10, D²I区; 11, D区域; 12, E'トレンチ; 13, D³I区; 14, D区域
- 図14 D⁴I区
- 図15 1, F₁; 2, F₄; 3, B''トレンチ; 4, CⅢ区; 5, CXⅢ区; 6, D²I区; 7, D²⁻³Ⅱ区; 9, D³⁻⁵I区; 10, E'トレンチ
- 図17 1, B'トレンチ; 2, D¹I区; 3, CXⅢ区; 4, D²⁻³Ⅳ区
- 図19 1, BV区; 3, B''X区; 5, E'トレンチ; 6, B''Ⅶ・Ⅷ区; 7, D区域1号溝址; 8, Aトレンチ; 9, E'トレンチ; 11, AX₂区; 12, AV₂区; 13, AV₂区, 14・15, AV₂区; 16, D²⁻³Ⅲ区; 17, D区域, 18, D²⁻³I区; 19, D¹I区; 20, D区域; 21, B''X区; 23, BⅠ—Ⅲ区
- 図20 1, D区域; 2, CⅧ区; 3・4, CⅠ—Ⅱ区; 5, D区域; 6, GV区; 7, D⁵I区; 10, E'トレンチ; 11, EV区; 12・13・15, E'トレンチ
- 図21 3・4, E'トレンチ; 5, D区域; 6, C''Ⅰ—Ⅱ区
- 図22 2, BⅦ—X区; 3, D⁵I区; 6, BⅦ—X区; 8, E'トレンチ; 10, D区域
- 図24 1・2, D区域; 3, E'トレンチ; 4・5・6, D区域; 7・8, CX区; 9, D区域1号溝址
- 図25 1, D³⁻⁵I区; 2, Eトレンチ; 4, BV区; 5, D²Ⅳ区; 7, D区域; 8, B''X区
- 図26 2・3, D区域; 4, CX区; 5, D²⁻³Ⅱ区; 6, Eトレンチ; 7・8, D区域
- 図27 1, D区域1号溝址; 4, D区域; 5, AX₂区; 6, D²⁻³Ⅱ区

引用挿図出典

- 図8—1 文献3, 34頁, 第9図, 2
2~4 文献12, 156頁, 第139図, 17~19
- 図13—1~4 文献11, 第十一図, 第三十二図, 第三十二図, 第三十図から
- 図16 文献14, 58頁, 挿図28—3
- 図23—1, 2 文献12, 156頁, 第139図, 28, 29
3 文献1, 130頁, 第89図, 538

文献 (本号掲載分のみ)

日本文

1. 井上裕弘編 『御床松原遺跡』(志摩町文化財調査報告第3集) 志摩町教育委員会, 福岡県 1983
2. 小場恒吉・榎本亀次郎 『楽浪王光墓』(古蹟調査報告第二) 朝鮮古蹟研究会, 京城(ソウル) 1935
3. 九州大学文学部考古学研究室 『対馬: 浅茅湾とその周辺の考古学調査』(長崎県文化財調査報告集第17集) 長崎県教育委員会 1974
4. 小泉頭夫・沢俊一 『楽浪彩篋塚』(古蹟調査報告第一) 朝鮮古蹟研究会, 京城(ソウル) 1934
5. 駒井和愛 『楽浪郡治址』(考古学研究第3冊) 東京大学文学部 1965(再録: 同『中国都城・渤海研究』 85~119頁 雄山閣 1977)
6. 関野貞ほか 『楽浪郡時代の遺蹟』(古蹟調査特別報告書第4冊) 図版(上下)・本文 朝鮮総督府 1925—27
7. 谷豊信 「楽浪土城址の発掘とその遺構: 楽浪土城研究その1」『東京大学文学部考古学研究室紀要』第2号 1983
8. 谷豊信 「楽浪土城址出土の土器(上): 楽浪土城研究その2」『東京大学文学部考古学研究室紀要』第3号 1985
9. 朝鮮総督府 『朝鮮古蹟図譜一』 1915

楽浪土城址出土の土器 (中)

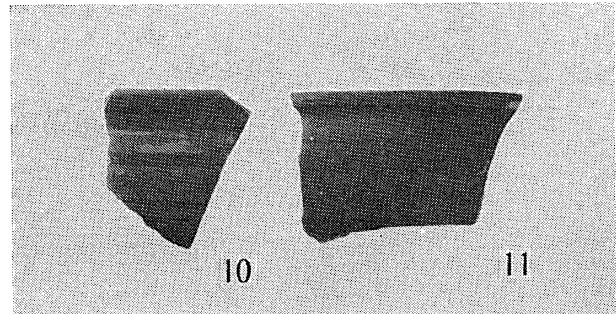
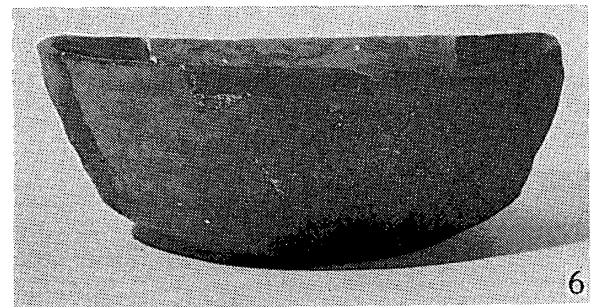
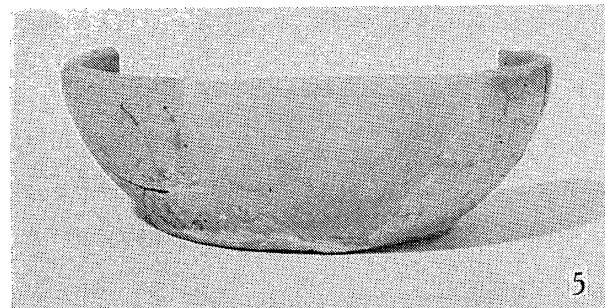
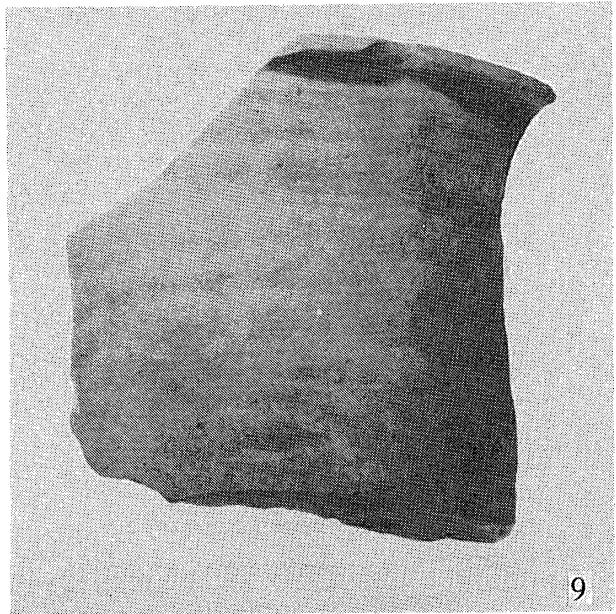
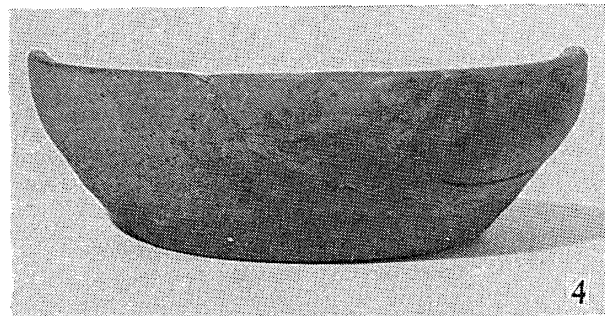
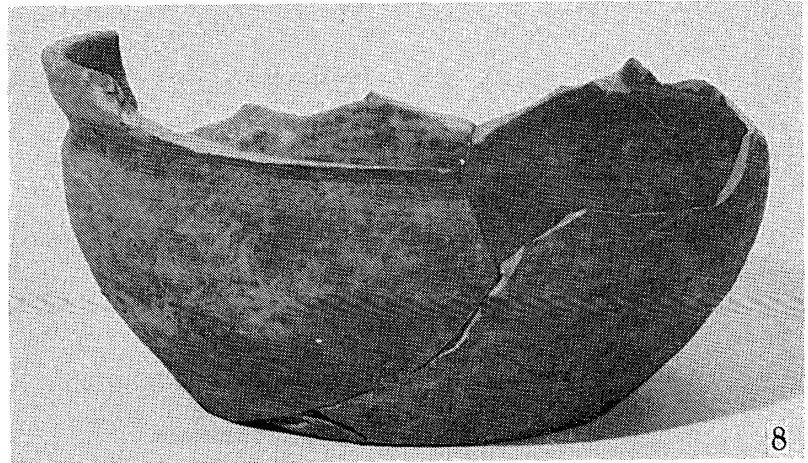
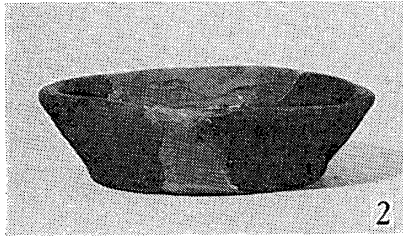
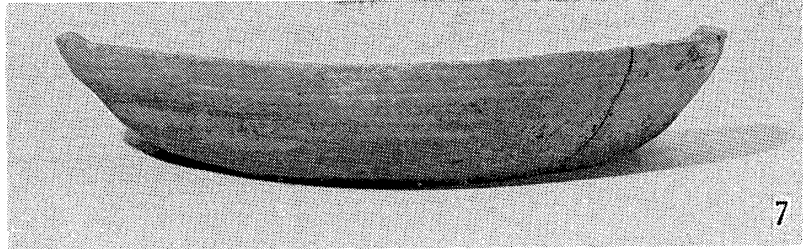
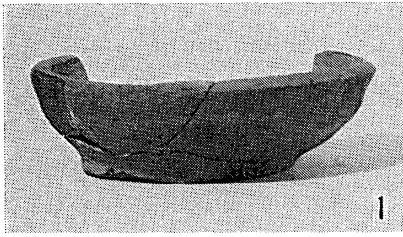
10. 水野清一編 『万安北沙城：蒙疆万安県北沙城及び懐安漢墓』 (東方考古学叢刊乙種第五冊) 東亜考古学会, 東京 1946
11. 森修・内藤寛 『宮城子』 (東方考古学叢刊第四冊) 東亜考古学会, 東京・京都 1934
12. 柳田康雄・小池史哲編 『三雲遺跡Ⅲ：糸島郡前原町大字三雲所在遺跡群の調査』 (福岡県文化財調査報告書第63集) 福岡県教育委員会 1982

中国文

13. 中国科学院考古研究所編 『洛陽虢溝漢墓』 (中国田野考古報告集考古学専刊丁種第六号) 科学出版社, 北京 1958

朝鮮文

14. 朝鮮民主主義人民共和国科学院考古学・民俗学研究所 『台城里古墳群発掘報告』 (遺跡発掘報告第5集) 科学院出版社, 平壤 1958
15. 朝鮮民主主義人民共和国科学院考古学・民俗学研究所 『智塔里遺跡発掘報告』 (遺跡発掘報告第8集) 科学院出版社, 平壤 1961
16. 金日成綜合大学 『東明王陵とその付近の高句麗遺跡』 金日成綜合大学出版社, 平壤 1976 (日本語訳 金日成綜合大学編, 呂南喆・金洪圭訳 『五世紀の高句麗文化』 1~176頁 雄山閣 1985)
17. 社会科学院考古学研究所田野工作隊 『考古学資料集第5集』 科学・百科事典出版社, 平壤 1978

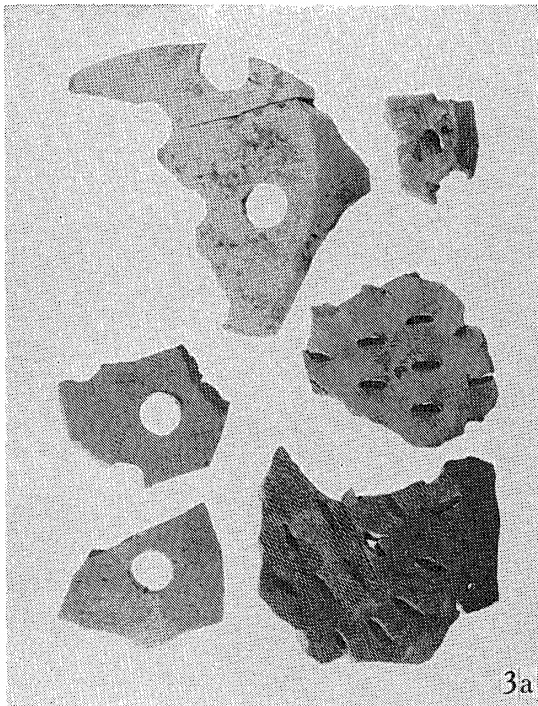
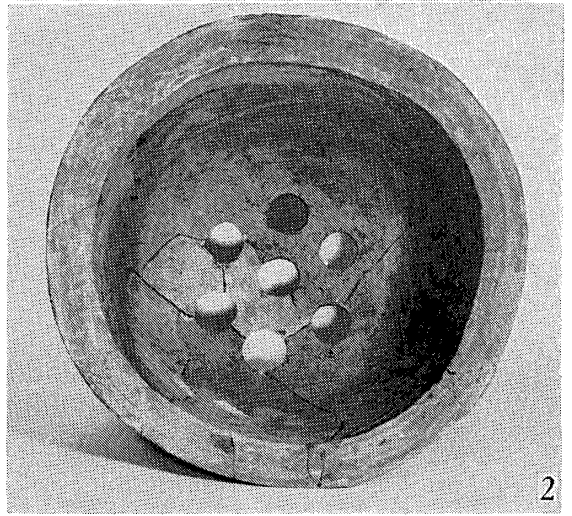
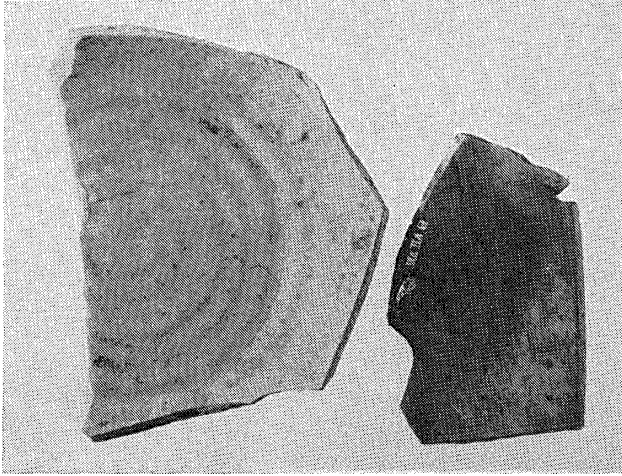
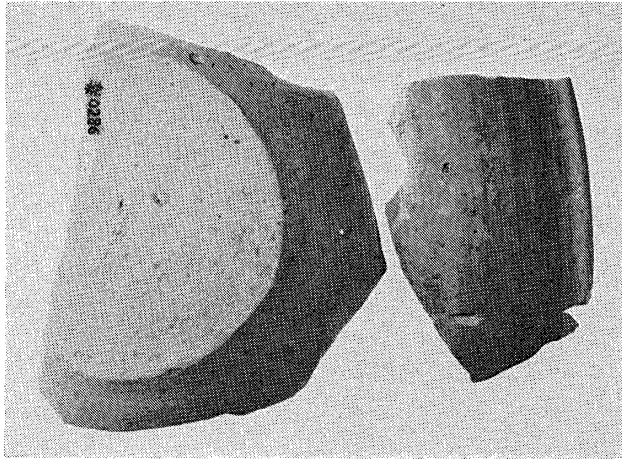


軟質灰色系土器

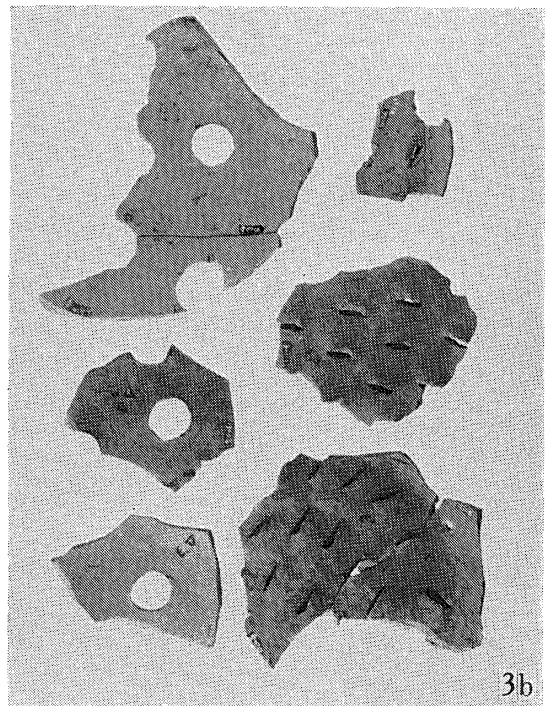
小型鉢・鉢・盤・盆

楽浪土城址出土の土器（中）

(図版 8)

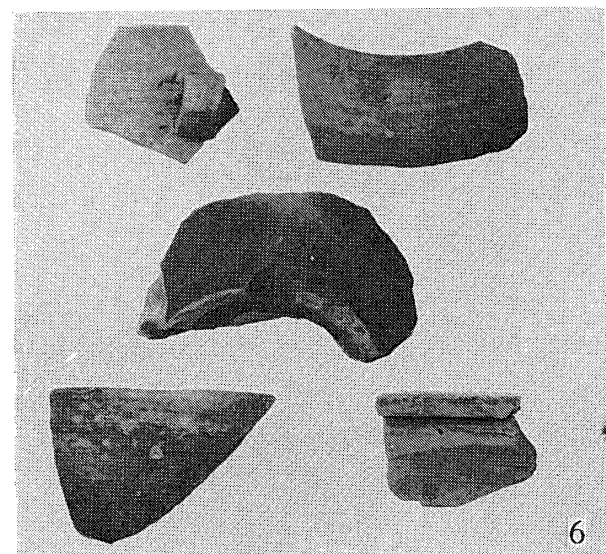
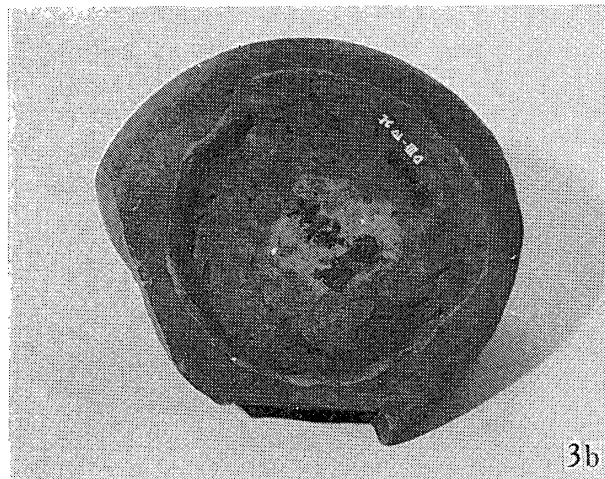
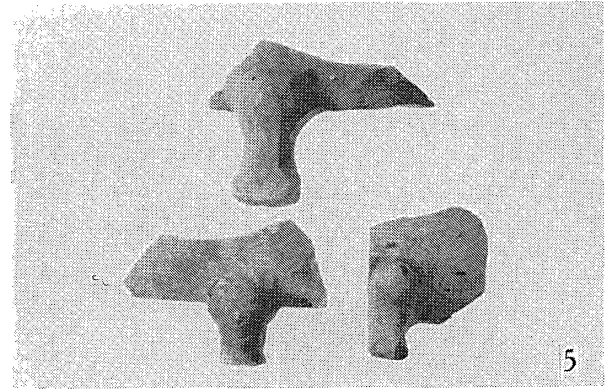
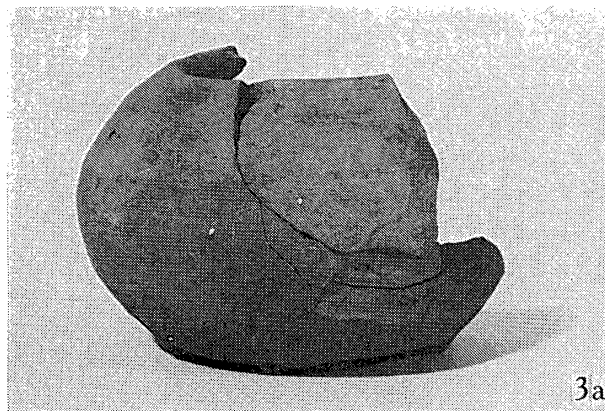
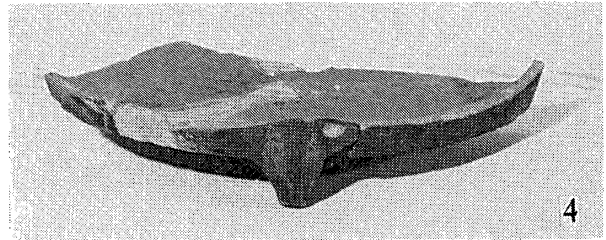
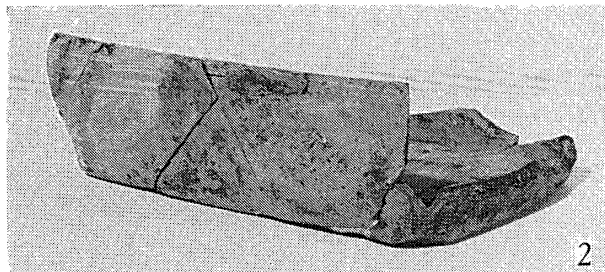
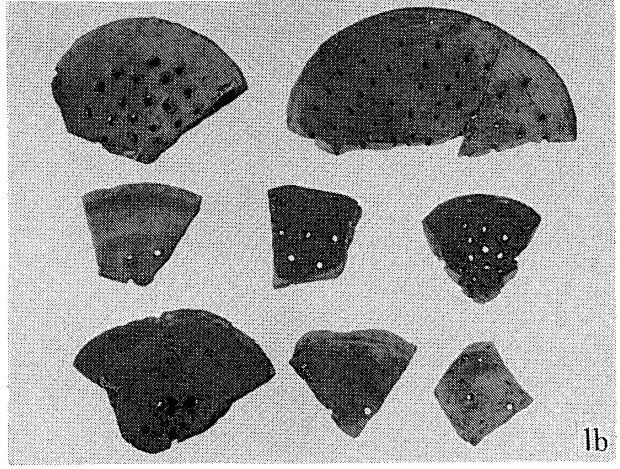
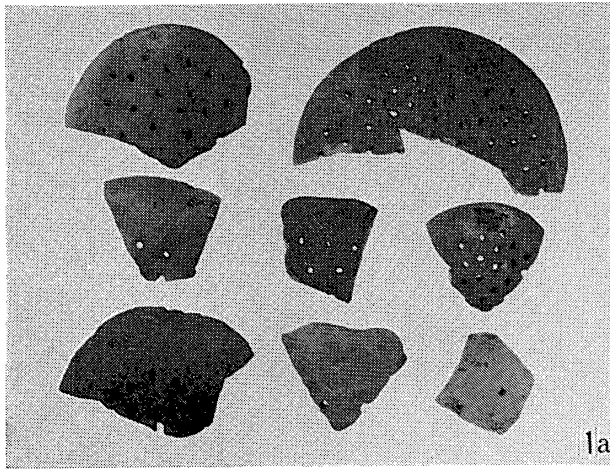


3a

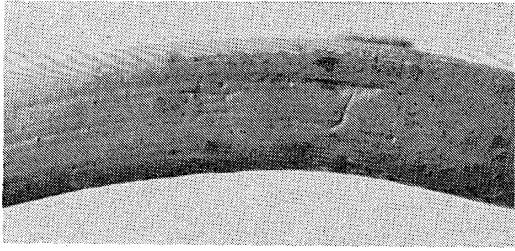


3b

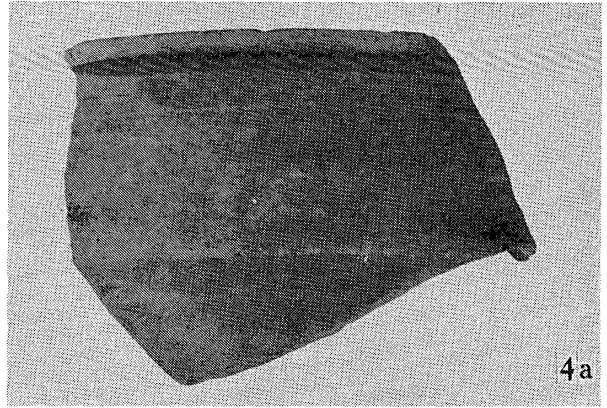
軟質灰色系土器 盆・甑・甑底部破片



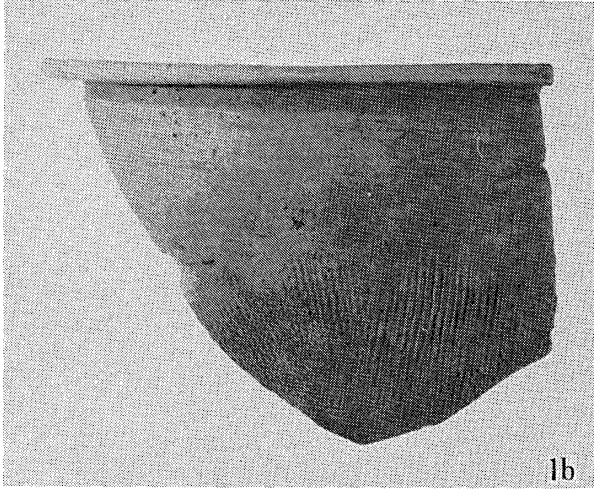
軟質灰色系土器 有孔土器（内外面）・箱状の土器・有脚土器・その他



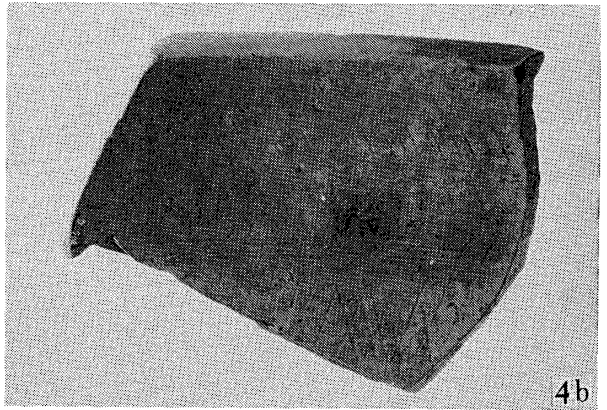
1a



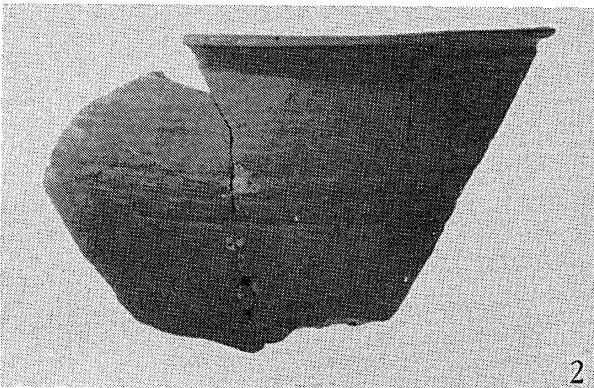
4a



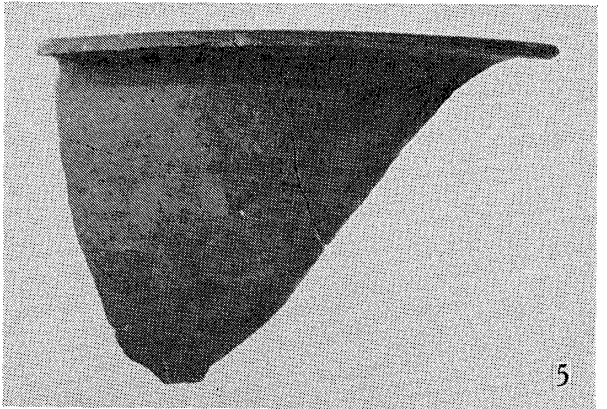
1b



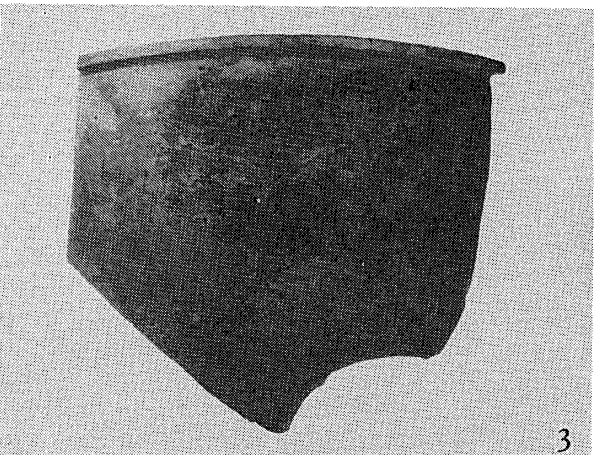
4b



2



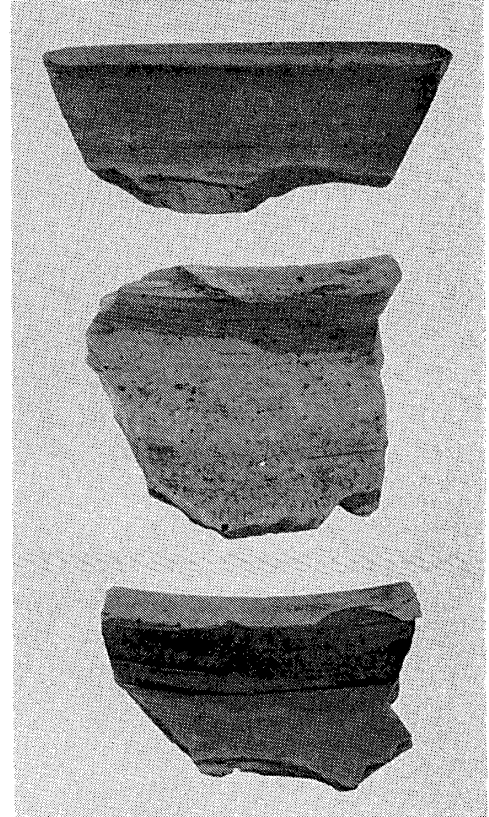
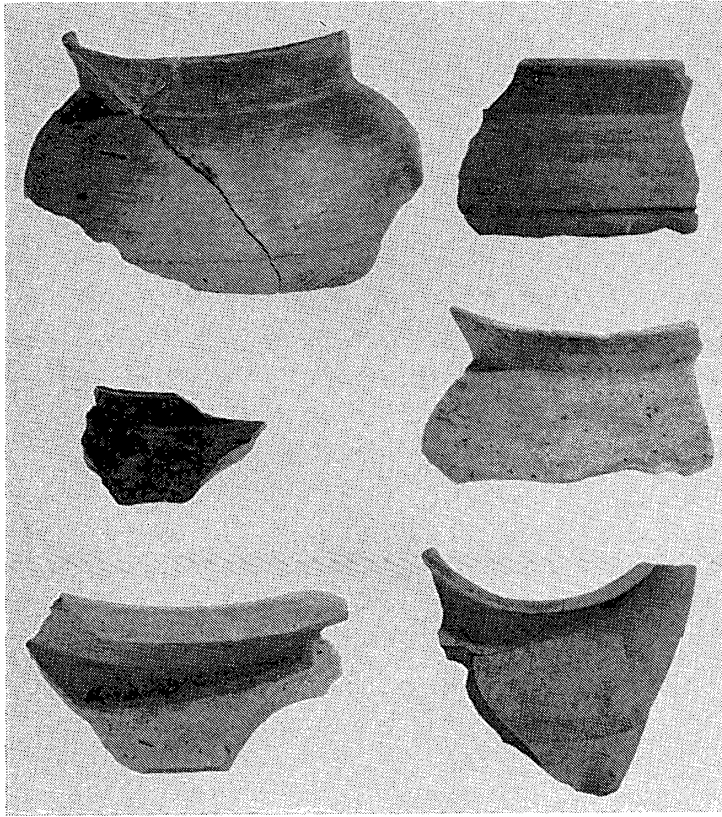
5



3

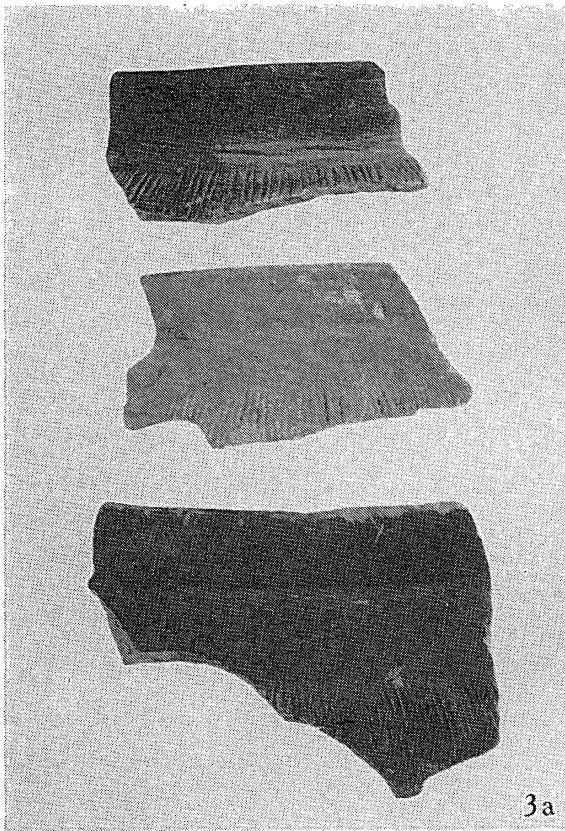


6

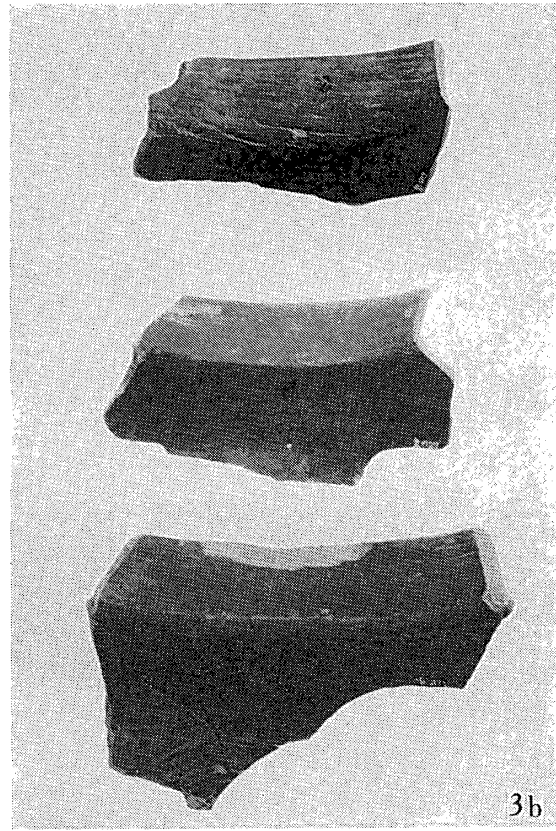


1

2

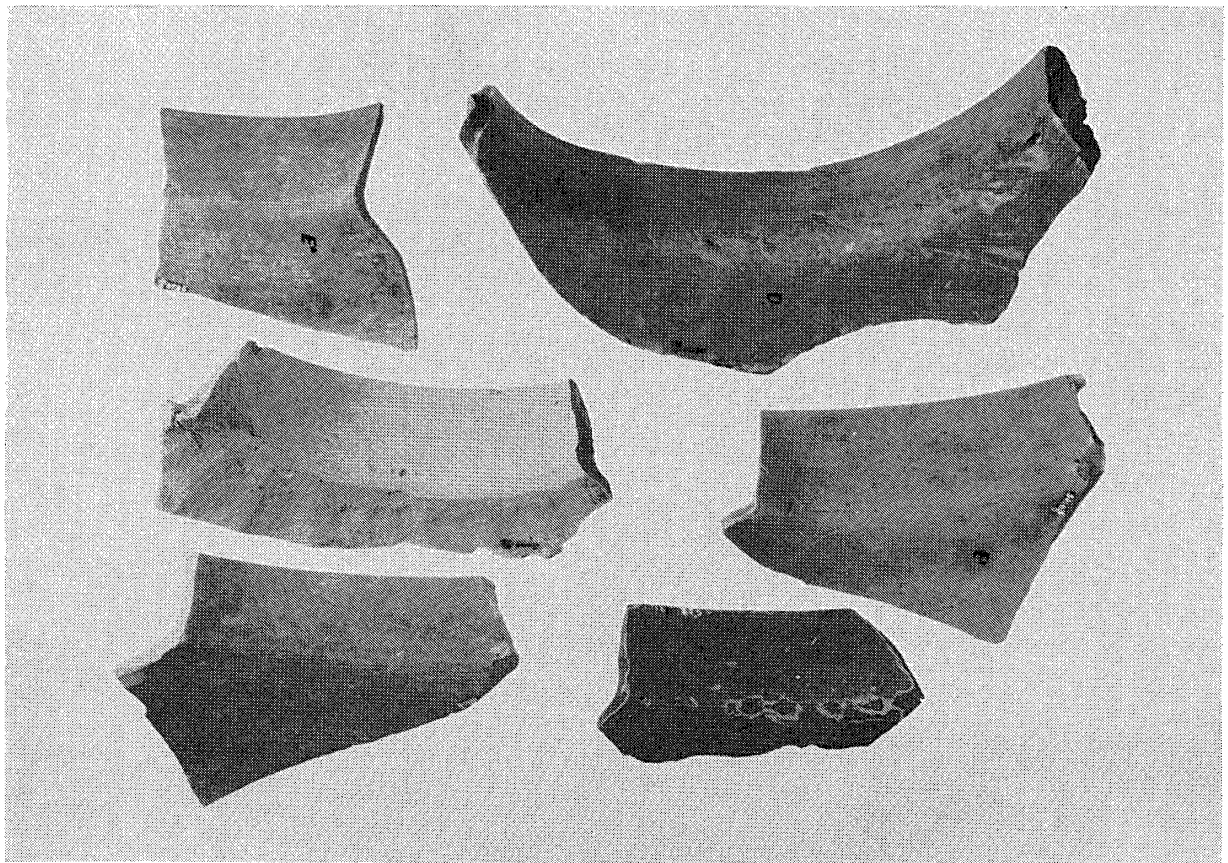
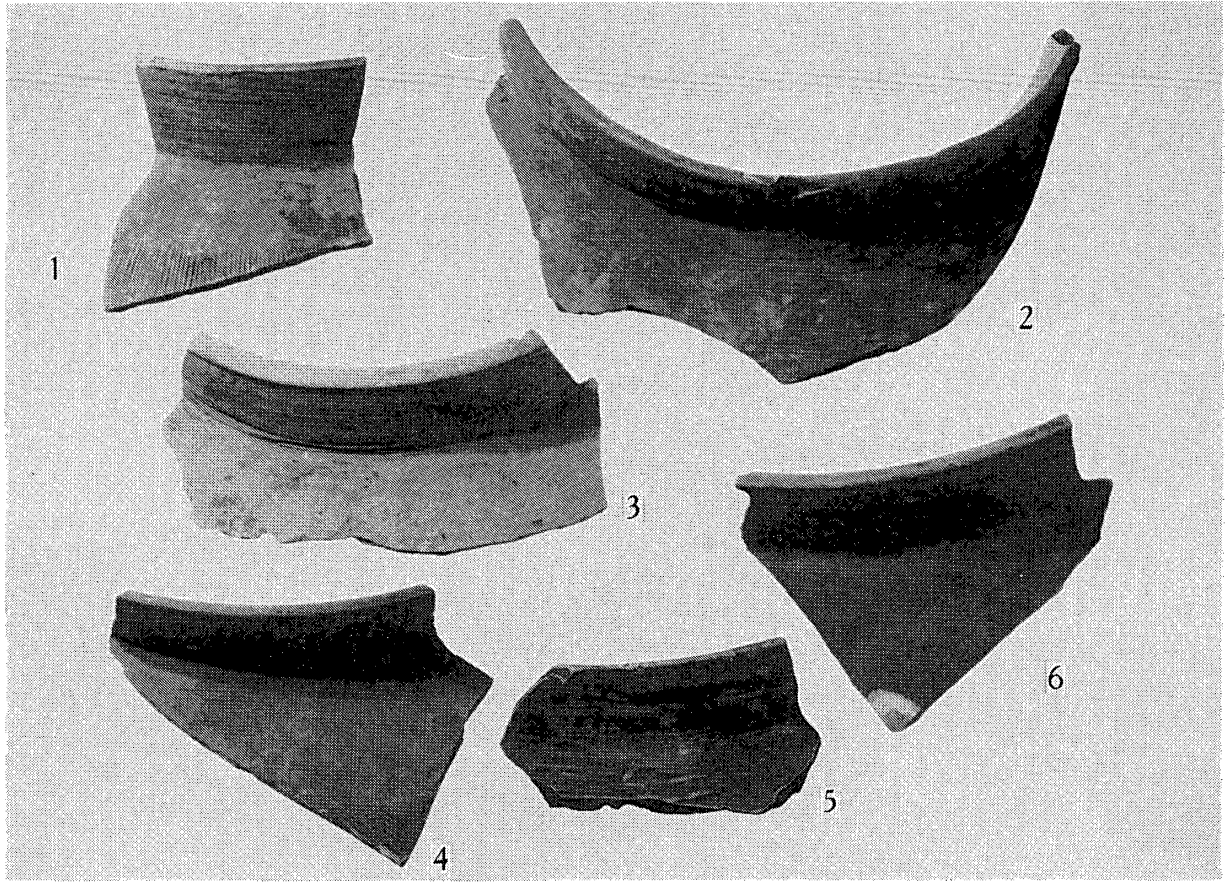


3a

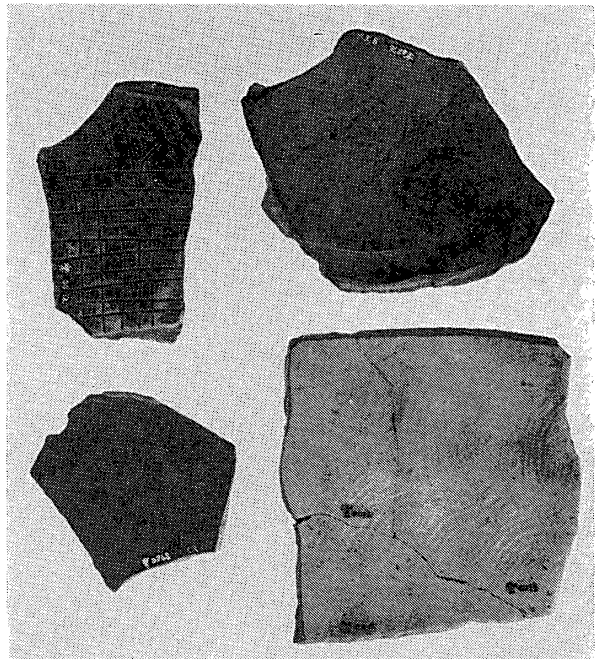
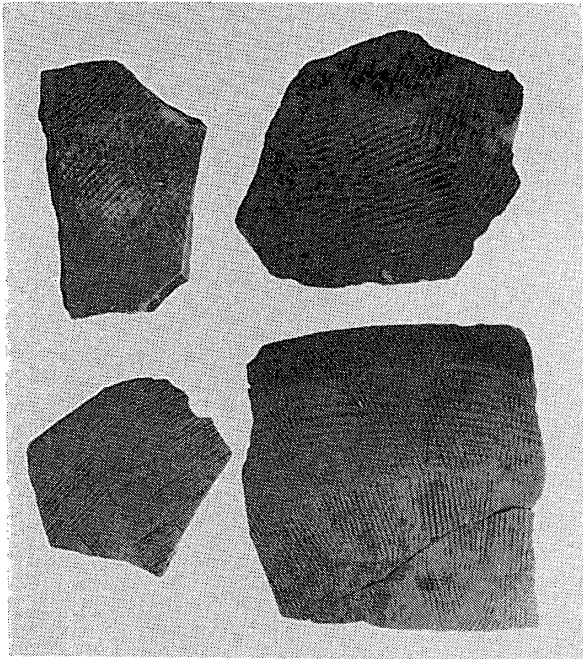
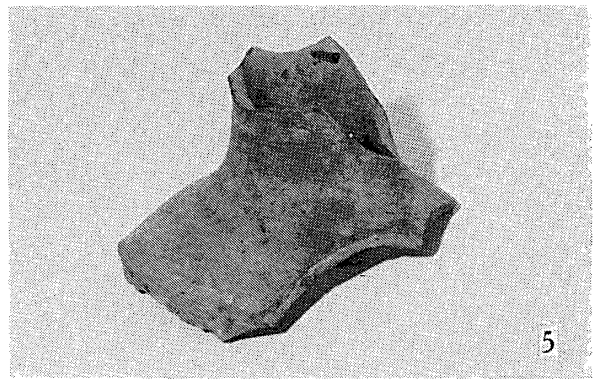
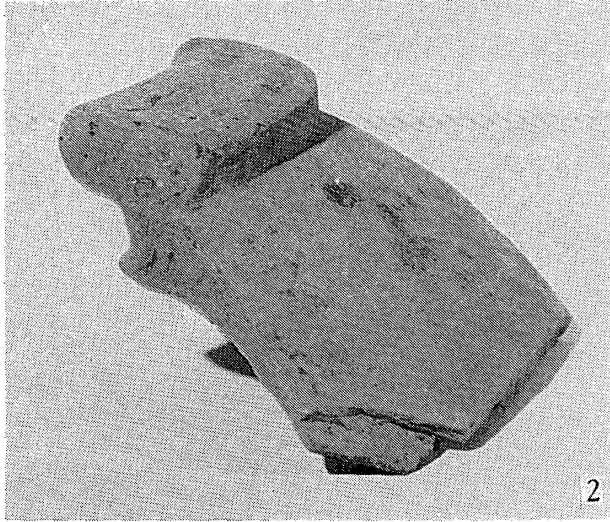
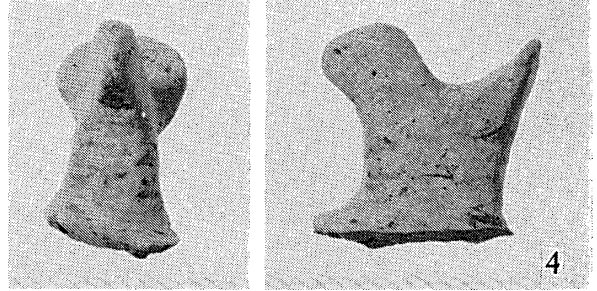
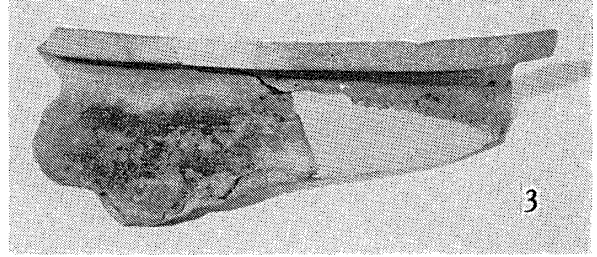
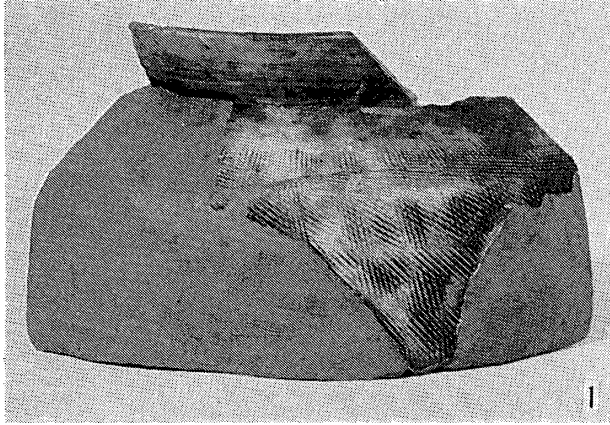


3b

軟質灰色系土器 罐口縁部破片



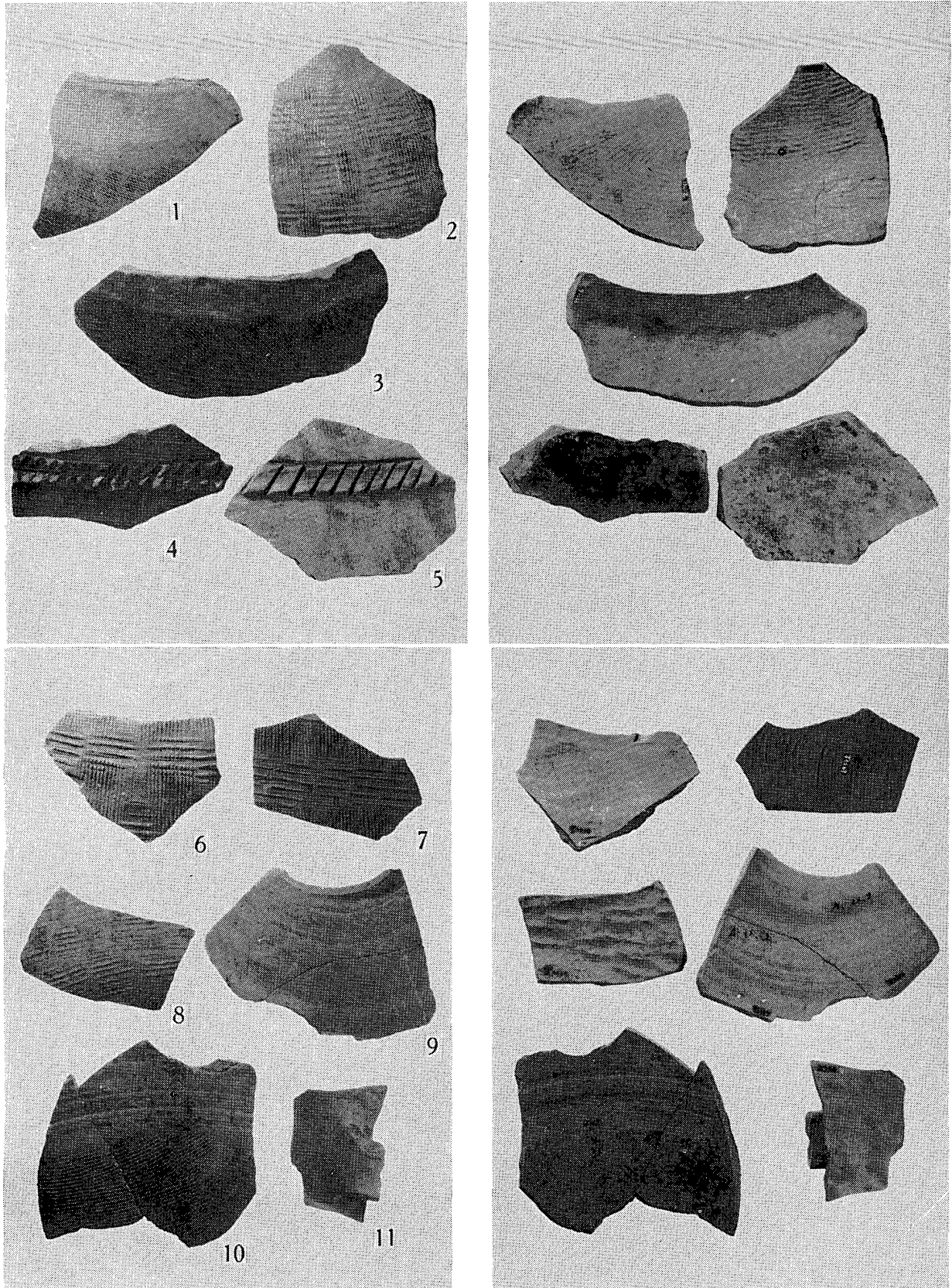
軟質灰色系土器 罐口縁部破片（下は上の内面）



6a

6b

軟質灰色系土器 罐・甕・底部破片・その他



軟質灰色系土器 胴部破片（右は左の内面）